

殿村遺跡とその時代Ⅲ

— 平成 24 年度発掘報告会・講演会の記録 —



2014

松本市教育委員会

目 次

口絵	3
目次	4
例言	4
平成 24 年度殿村遺跡・虚空蔵山城跡発掘調査報告	5
講演会「殿村遺跡とその時代―虚空蔵山城と中ノ陣城から見た戦国時代―」 笹本正治	16

例 言

- 1 本書は、松本市教育委員会が主催し、平成 25 年 3 月 16 日（土）にピナスホール（松本市役所四賀支所 1 階）で行った「殿村遺跡とその時代―平成 24 年度発掘報告会・講演会―」の内容を収録したものである。
- 2 本文は、松本市教育委員会が録音したものを文章化し、発表者が加筆・修正を加えた。
- 3 挿図は、当日の配布資料、スライドから再構成し、必要により加除した。
- 4 本書の編集は、松本市教育委員会文化財課埋蔵文化財担当が下記の作業分担で行った。
文字起こし：宮島義和、挿図・本文編集（DTP）：伊藤 愛、総括：竹原 学

表紙写真 長安寺の木造大覚禪師倚像（室町時代）

平成 24 年度殿村遺跡・虚空蔵山城跡発掘調査報告

松本市教育員会文化財課の竹原です。これから今年調査した殿村遺跡と虚空蔵山城の成果について報告をさせていただきます。

1 殿村遺跡第 4 次調査

殿村遺跡については、みなさんもうご存知だと思います。ちょうど閉校した会田小学校の裏ですね。学校も含めてこの一帯が遺跡で、小学校の北側が平成 20・21 年の発掘調査地、中世 15 世紀を中心とする石積みを伴った平場の跡が出てきたのです。それを 21 年まで調査した結果、遺跡が保存になりました。そこで平成 22 年からは笹本先生をはじめ調査指導委員会のご指導のもとで、その周囲の状況がどのようになっているのか、遺跡がどういう性格だったのかということ調べるために、以後の発掘をしてきているのです。

それでは今年発掘した場所を具体的に説明します。図に示した白枠が平成 20・21 年の発掘調査区です(図 1)。図中の写真のように中世のぶ厚い盛土、大規模な造成工事に伴ってできた平場の縁取りに、15 世紀の段階から石積みを構えていました。しかし、この時にはまだ平場の周囲、すなわち周縁部の状況がどうなっているのか十分には分からなかったのです。そこで平成 22 年からは平場の周縁部がどのような構造になっているのか、例えば石積みが巡っていたのか、それとも堀のような施設があったのか、あるいは土塁が回っていたのか、それを調べるために、1 次調査区の外側を中心に発掘を進めています。今年は、東側の状況を調べるために 4A1 トレンチを掘りました。それともうひとつ、西側、旧会田中のプールの南脇に 4A2 トレンチを開けました。さらに会田中学校旧校舎の周辺における遺跡の広がりも調べたく、4C1 トレンチを調査しました。それぞれについて簡単に説明します。

まず 4A1 トレンチですが、予想どおり 1 次調査で確認した平場が連続し、ぶ厚い盛土を伴う地面が重層する姿が捉えられました。そして一番下層の地面からは石積みを使った特徴的な遺構が出てきました。これについては後で詳しく説明します。次に北西側の 4A2 トレンチですが、ここでは中世の盛土や造成の痕跡がまったく見られません。他の地点と同様、グラウンド造成に盛った 1 m 近い土砂を取り去ると、昭和 28 年の畑土が出てきました。さらにそれを取り除くと、わずか 20cm 下で地盤の土が顔を出してしまいました(図 2)。です

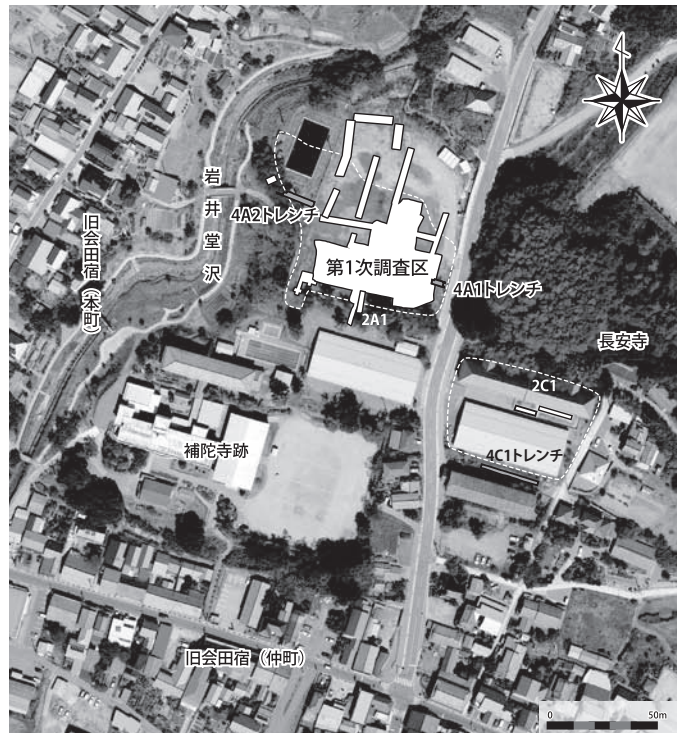


図 1 発掘調査区と 1 次調査で見つかった石積み・平場



図2 4A2 トレンチ



図3 4C1 トレンチ

からここには中世の盛土はなかったのです。ただ、中世のものと思われる柱穴がいくつか見つかったので、平場の一番外縁に近いところに当たるのではないかと想像されます。他にもおそらく江戸時代が明治時代以降につくられたと思われる暗渠^{あんきよ}の跡や、時代の分からない溝状の遺構がいくつも出てきました。それらの詳しい説明は省きますが、一つだけ特異なものとして、今から約 7000 年前、縄文時代前期の穴が見つかりました。私たちが追求している中世の遺構ではありませんが、殿村の地に早くも 7000 年前には人びとが生活を始めていたことが今回の調査で分かりました。これも一つの収穫でしょう。ちなみに穴の中からは縄文土器や矢じりが出土しました。

次に旧会田中学校校舎の裏に開けた 4C1 トレンチです。写真に見えている建物が旧会田中学校の校舎で、そのすぐ裏手に長さ 30 m のトレンチを設けました (図 3)。ここでもすぐに地盤が顔を出します。特に中央から西側にかけて 3 分の 2 の範囲は茶色い基盤堆積土がむき出しで、中学校の造成に伴う削平によりかつての地面が失われていることが分かりました。対して長安寺参道に近い東側の部分は削平こそありませんが、やはり中世の盛土は見られません。その代わりに今から 1200 年前、奈良時代末～平安時代の初め頃の地面が残されていました。そこには須恵器^{すえき}と呼ばれる窯^{かま}で焼かれた焼物のかけらが散在しており、同時代の穴がいくつか検出されました。どうやらここには中世の人びとの生活跡はないけれども、より以前、奈良・平安時代の人びとの活動の跡が広がっていたことが明らかになりました。

では、中世の盛土が一番厚く残っていた 4A1 トレンチについて、もう少し詳しく見てみましょう。まず地層の断面です (図 4)。一番上に見える平らな部分が昭和 28 年の地面です。現地表面からおよそ 1 m 下にあります。続いてその直下には 16 世紀頃、1 面と呼んでいる地面があり、さらに 40 ~ 50cm 下からは 15 世紀末 ~ 16 世紀の 2・3 面と言っている地面が出てきます。そこからさらに 1 m 下には 15 世紀の地

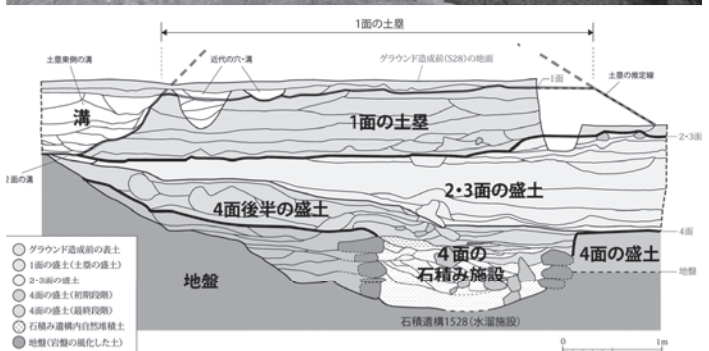


図4 4A1 トレンチの土層断面 (南壁)

面（4面）があって、ここでは中世だけでも3時期にわたって造成がくり返されていたことが分かります。

これについて、新しい地面から順を追って見ていきます。まず昭和28年の地面の直下にある第1面、すなわち戦国時代16世紀の地面です（図5）。この面は1次調査ですぐ隣を掘りましたが、今回はちょっと地面の様子が違っていました。そこで地層をよく観察すると、点線で示した幅5mほどの範囲が土塁の盛土ではないかということが分かりました。つまり、ちょうど4A1トレンチの範囲に南北方向の土塁が走っていて、おそらく高さは2m以上はあったと思うのですが、後世に削られて土台だけが残ったと考えられます。

次に土塁の盛土を全部取り除くと、2・3面、15世紀の末～16世紀初めにかけての地面が現れます（図6）。この面はどうやら1面の土塁をつくる際に削り込まれており、本来の地面は失われてしまっています。写真を見ると、左側に青い粘土で塗り固められた石が南北に点々と連なっている状況が分かるかと思います。これは1面の土塁をつくる際に基礎として石を並べ、周りを粘土で固めたものかもしれません。あるいは土塁築造以前に塀があった痕跡かもしれません。この2・3面の盛土は非常に厚くて1m近くあるのですが、それを取り去ると4面、15世紀の地面がようやく出てきます（図7）。地上からは2m以上も深い所です。

この4面ですが、東側では地面が大きく傾斜して立ち上がり、破線で示したところが縁になっています。これを城郭用語で^{きりぎし}切岸と言います。2・3面段階で削平されているため推測の域を出ませんが、おそらく切岸から東側は現在の会田中学校のある尾根の裾がのびて来ていたのではないかと考えられます。山裾を削り込んで、さらに盛土をして4面を築造しているのです。そして切岸の内側からは石積みを伴う大きな穴が出てきたのです。今お話しした地層の関係は先ほどの図に整理してあります（図4）。

ここで4面から見つかった石積み遺構についてもう少し詳しく見てみます。実際は写真のような状況で見つかりました（図8）。一言で表すならば石積みの壁を有する四角い穴です。幅1.8mすなわち1間幅に対し、長さは推定2.7mつまり1間半の寸法であることが分かりました。ちなみに南側は未掘ですので鉄棒を突き刺して探っています。見つかった当初は平場を区切る堀の可能性も考えたのですが、結果的に南北側が閉じ、幅1間・長さ1間半で周壁に5、6段の石積みが伴う穴だということが分かったのです。石積みの高さは概ね90cm前後、ちょうど半間の寸法になりますので、全体的に規格性の強い構築物ということが分かります。しかし、他の城跡や居館跡などから出てくる石積み遺構の場合はもっと四角く造っていると思

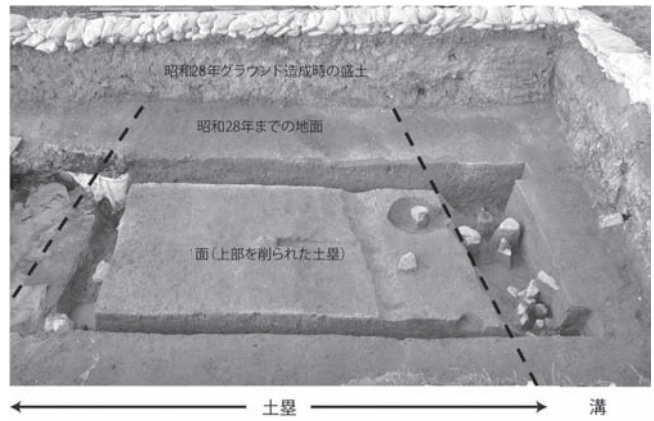


図5 1面（16世紀）の様子

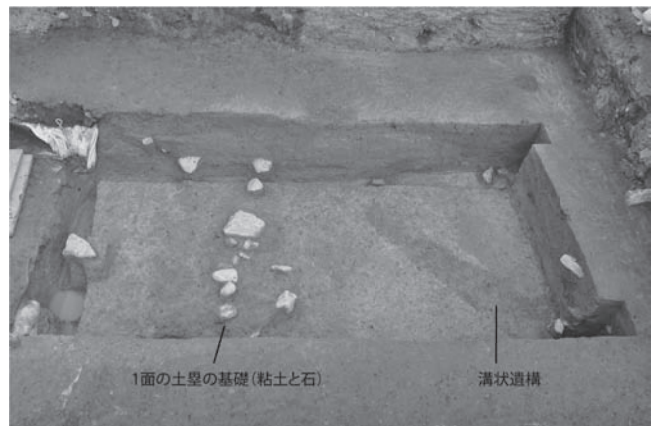


図6 2・3面（15～16世紀）の様子



図7 4面（15世紀）の様子



図8 4面の石積み遺構（水溜施設）



図9 自然石による石積み

うのですが、今回見つかったものは壁がカーブして膨らんだ、胴張り形を呈しています。

ちなみに内部から出土した瀬戸産大皿の破片から、この遺構のつくられた時期は15世紀と考えられます。ということは、1次調査で見つかった石積みとまさに同時期ということになります。そこで双方を比較しながら石積みの特徴を見ていくと、今回の遺構は横長の石をやや多く使うという点で、1次調査の石積みと比べると新しい手法への志向が少し感じられるのですけれども、それでもやはり使っている石材は一切加工を施さない自然石でそれを垂直に積み上げる、そして石積みの裏側はただ土で埋めていくだけで、松本城の石垣に見られるような裏込めの栗石といったものは一切ない、1次調査の石積み同様、古い未発達な技術でつくられたものであるということが分かりました（図9）。

次に遺構の中に堆積した土に注目すると、青灰色の泥とか砂が薄く何層も積み重なって徐々に埋まっていった状況がうかがえました。これは間違いなく水中に溜まっていったヘドロです。従って石積み施設の中には常に水が溜まっていたことは間違いのないと思います。この遺構の性格を考えるとすれば、やはり集めた水をここに溜めておく、いかなる用途で使った水かは明らかにできませんが、少なくとも造成された平場の中で必要な水として使われたことは間違いのないでしょう。

それでは、殿村遺跡の調査報告の最後に、遺跡の移り変わりをしておきたいと思います。この図は昨年も使いました（図10）。現時点での非常に不確実な想像図ですので、本当にそうだったのかはまだ分かりませんが、15世紀の段階において、岩井堂沢にのぞむ崖から東側にかけて元々の地面の上に最大で1m 20～30cmの盛土をして、あるいは後ろ側つまり調査事務所のある北側ですね、その斜面の土を削って平場をつくりました。そして盛土の一番先頭に石積みを構えたり、通路をつくったり、あるいは土塁を構えて縁取りをしていたということが分かりました。さらに平場の南東側は一段低く窪地になっていたようです。その

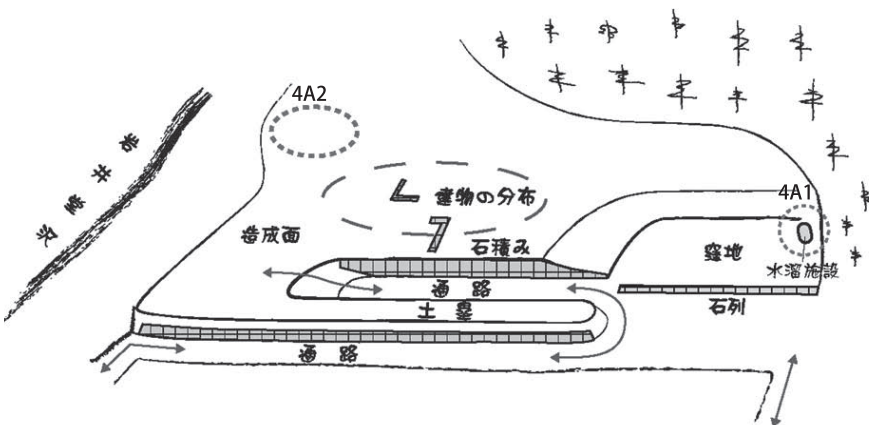


図10 平場の移り変わり① 4面（15世紀）

窪地の東端に水溜め施設と思われる石積み遺構があったということが今回の調査で分かりました。

また、西側の4A2トレンチは、この図で見ても遺跡の主要範囲からは一番遠く末端にあたる場所で、あまりいろいろな施設があった場所ではなかったと考えられます。

それが次の3面段階、まだ15世紀のうちですが、その頃になりますと水溜め施設のあった窪地は埋め立てられ平場が延長されます(図11)。これが先ほど見ていただいた4A1トレンチの2・3面の基盤となるぶ厚い盛土にあたるのです。ですからこの段階では石積み施設はしっかり地中に埋もれてしまっ

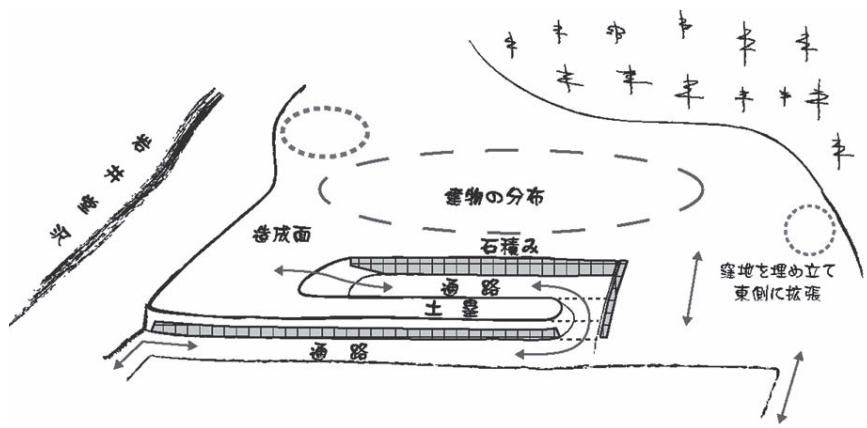


図11 平場の移り変わり② 3面(15世紀)

えないのです。一方で北西側、4A2トレンチ周辺はたいした造成も行われず前の段階からそのままの姿だったのです。

さらに時期が下って16世紀、2面～1面の段階に入りますと、今度は平場の前にある延長30mあまりの石積みが完全に埋め立てられ、その前にあった土塁まで一気に地面が上げられます(図12)。それとともに平場の後ろ側も山裾もさらに削平を進めて広げていく、平場が最大規模になるのがこの段階です。それでもやはり北西側はあまり積極的に建物などがつくられる区域ではなかったのではないかと、4A2トレンチの所見から見てきました。一方、東側の4A1トレンチ周辺では今回見つかった土塁が南北方向に走っていたようです。それで、ここに土塁があったということは、その外側は平場の外ということになります。通常、土塁があれば外側は切岸として段差になるか、あるいは堀になっているのですが、先程も言ったようにここでは東側に山が迫っています。ですからこの山裾と土塁の間がどうなっていたのか分かりません。もしかしたら掘り割りのようになっていたのかもしれませんが、残念ながら確かめる術はありません。現状ではこのような形で殿村遺跡は移り変わっていったのではないかと想像されます。

ところで以前開催した講演会において、中井均先生や中澤克昭先生からは、ここがどうもお寺、宗教施設の跡だった可能性が高いのではないかとのご指摘をいただきました。もしここを宗教施設として位置づけていくならば、その構造や内部にあった施設の性格を具体的に示さなくてははいけないと思いますが、残念ながらまだまだ材料が足りません。今後の調査でもう少し内部の建物などの様子も探っていきたいと思っております。

では殿村遺跡の報告の最後、会田中学校校舎の裏で調査した4C1トレンチの結果です。実は平成22年にゲートボール場と北の校舎の間を発掘しています。ここには中世の盛土を伴う造成跡がありました。おそらく北の校舎からゲートボール場建物にかけての一带が造成面の範囲だったろうと思われる。それより一段低い、今回調査した南の校舎の段まで盛土は広がっていなかったようです。あともうひとつ、小学校のある周辺はまだまったく考古学的な調査を行っていない場所です。ここは会田宿をのぞむ高台の先端にありますので、立地的には一等地です。ここももしかしたら何かしら中世の遺構があったのではないかと、実際ここには^{ふだ}補陀寺と呼ばれる中世までさかのぼるお寺が体育館と校舎の辺りにあったのですから、必

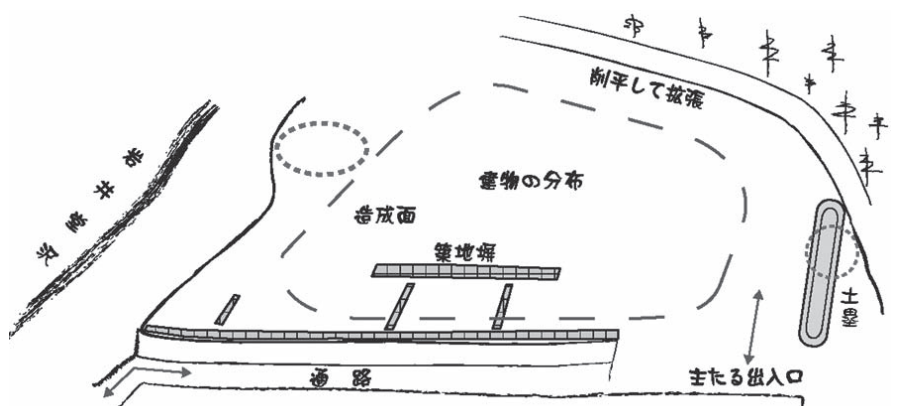


図12 平場の移り変わり③ 2～1面(16世紀)

ず何かあるのではないかと、そのように期待しています。

2 虚空蔵山城跡第2次調査

次に虚空蔵山の調査報告に移りたいと思います。虚空蔵山についてはもうみなさんご存知の通りです（図13）。これまで何回もお話しましたが、この均整のとれた美しい山は古来信仰の対象であったことは確実でしょう。それを具体的に示すものが岩屋神社であったり、あるいはオゲ水や水ノ手と呼んでいる湧水であったり、またあるいは山頂をとりまいている巨大な岩場であったりといった話をしたと思います。古来人びとの信仰の対象であった虚空蔵山の麓、殿村遺跡のある岩井堂沢の一带、決して広くないその領域に古代あるいは中世に至ってお寺がひしめくようにつくられた、まさに虚空蔵山麓が信仰の空間としてにぎわいを見せていた時期だったと思うのですけれども、ある時そこにお城がつけられました。具体的には峯ノ城、あきよしとりで秋吉砦、それから中ノ陣といった戦国時代の山城がつけられるのです。

ではこうした信仰の山になぜ、いかなる理由でお城がつけられたのか、その事情については後ほど笹本先生から広がりのあるお話をいただけるかと思いますが、山城と宗教施設あるいは信仰の対象が複合した姿を虚空蔵山に見ることができます。その中で私たちが大変不思議に思っていたことは、山城というと兵を駐屯させて高いところから周辺ににらみを利かせることができる、そういうことから、普通は山の尾根の上にくるわ曲輪を構えてそこから必要なたてぼり豎堀を下ろしたり、ほりきり堀切を切って防御するわけですが、そういった尾根上に展開するお城の施設に対して、この虚空蔵山城では特に秋吉砦と中ノ陣の間にある湧水、水ノ手を中心とする大きな谷間の部分に非常に立派な平場がつくられている姿を見ることができます。実際この山を踏査すると、宮坂先生のなわぼりず縄張図（図14）にもはっきりとこの水ノ手の平場が記されているのですが、実は中ノ陣から西へ下りた知見寺沢の奥にも同じように立派な平場がありますし、それから規模は小さいですけれども、岩屋神社に直登していく急傾斜の参道ですね、鳥居から登ってしばらくの間、両側に雛壇のような平らな地面がいくつか残っています。

このように尾根上だけでなく谷間にも平場がたくさんあるということが分かってきました。そして特にこの水ノ手から下の平場群は、後ほど言いますようにすべて石積みを伴っており非常に立派な構えだったのです。なぜこのような谷間に平場があるのか、これを果たしてお城の施設と言っているのか、あるいはここが信仰の山だったとしたら、むしろそれに関わってくるお寺の跡といった宗教施設が元々あって、その



図13 虚空蔵山城

上にお城が乗っかっているのか、それを調べることで、宗教施設の可能性が高い殿村遺跡の性格も浮かび上がるのではないかと、そうした思いからこの場所で発掘を実施したのです。ですから、お城の発掘というよりは一番は尾根上の大きな曲輪や豎堀を掘りたいところなのですが、私たちの目的はあくまでもこの谷間にある平場をどう解釈す



図 14 虚空蔵山城の縄張図（宮坂武男氏作図）

るか、そこが問題でした。

ここで図を見てみましょう。まず水ノ手の湧水の位置を確かめてください（図 15）。林道から中ノ陣に向かう道筋にありますね。その湧水の下に奥行きが7～8 m、幅が長いところで65 m、一番短いところでも30 m近くある細長い平場が雛壇状に合計6面つくられているのです。この周辺、たとえば水ノ手から上の方にも不整形な削平地はたくさんあるのですけれども、この6面だけは際だって整然とつくられているのです。しかもすべてが切岸に石積みを構えています。今回、6段の中で最上段の平場1と、次の段の平場2を発掘しました。平場1は平坦でここから建物跡が見つかっています。それから平場2は斜面になっていたので、元々の地面は浸食されてしまっているんだろうと思って発掘したところ、最初からだいたい傾斜角30°くらいの斜面をわざわざ造っていることが分かりました。まだ発掘はしていませんが、その下の平場3・4・5・6と書いてある段は平らな地面がつくられていますので、おそらく何らかの建物があったらと思うれます。そしてこの平場群の東の尾根には秋吉砦があります。一方、西の尾根には中ノ陣があります。この二つの砦に囲まれて、あたかも守られているかのようにこの場所があるということに注目してください。さらに秋吉砦からのびてくる縦堀、しかも堀の脇には土塁、部分的には石塁が伴っています。こうした土塁と堀でしっかり防御されている、そういうところに6段の平場があっ



図 15 水ノ手周辺の平場群と発掘地点



図 16 平場 1 の調査区と柱穴群



図 17 平場 1 の前につくられた石積み (中央部)



図 18 平場 1 の前につくられた石積み (西端部)



図 19 土台石 (アゴ止め石) の状況

たということです。

今回、最上段の平場 1 は立木の間を縫うように発掘しました。その結果、中世によく見られる小さな柱穴がたくさん出てきました (図 16)。発掘面積が狭いので何とも言えないところですが、正確に 1 間 180cm 間隔に並ぶ穴をつなげていくと、どうやら 2、3 棟の掘立柱建物、小さい建物がいくつか存在したであろうことが分かりました。それで建物を支えている地盤ですが、山側の斜面を削ってその土を前面の方に盛土している、しかもかなり傾斜の強いところですから、この盛土も先の石積みの裏側では 1.5 m 以上、2 m 近く施しています。非常に大きな造成をして平場をつくっているということが分かりました。しかも要所は版築という技法でしっかり土をたたき固めています。

さて、平場の前面に構えられた石積みですが、平場の規模に応じて短いもので 30 m、長いものでも 60 m くらいあります。写真は発掘した最上段の平場に伴う石積みで、ちょうど中央付近の様子です (図 17)。これが一番西端の石積みです (図 18)。どちらも現在残っているのは 1.5 m ほどの高さです。おそらく肩の部分はすでに崩れていますので、それを加えてもせいぜい 2 m ほどです。ところで用いられた石材は、沢を登っていくと斜面にゴロゴロといくらかでも転がっている。この山の一番芯を構成している輝石安山岩^{きせきあんざんがん}という、溶岩が固まった岩石、その転石の中からできるだけ平べったいもの、あるいは平らに割れるような節理^{せつり}というひび割れが入っている岩の塊、そうした原石から割り取ってきた石を水平に積んでいく、基本的にはそのような積み方をしています。それがこの石積みの特徴なのですが、よく観察すると平石ばかりではなく、時に大きな塊状の石を使っている所があるなど、ちょっと気まぐれな部分もあります。平石もよく見ると大きさが不揃いでやや雑然としています。では石積みの一番隅はどのように処理したのでしょうか？そこでは大きな石を一つドンと据えて、石積みはここで終りというように止めています (図 18)。平石だけを使うということはどうもなされていません。平場群の他の段を見ても、やはり端のところには大きな石を一つ据えて終わりにしている石積みがありましたので、どうもこれが一つの手法なのだと思います。

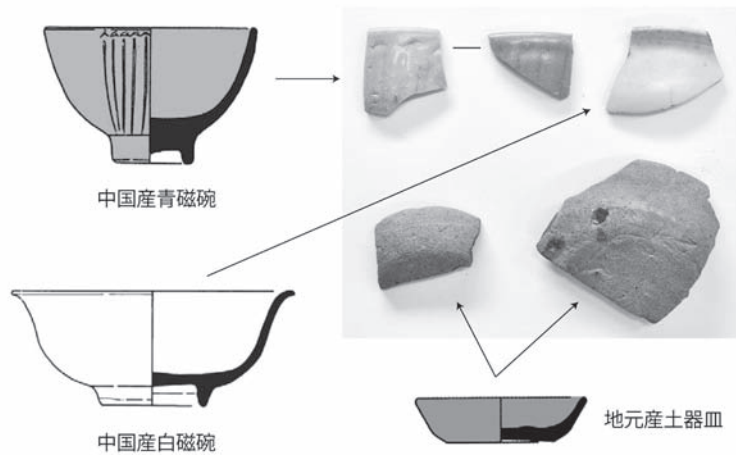


図 20 平場から出土した焼物

られていない構造が新たに見つかったのです。おそらく松本地方の山城の石積みを発掘して、土台の構造まで明らかにできたのは今回が初めてかと思います。

ここで石垣からいったん外れて、出土した遺物を見てみましょう（図 20）。これらは平場上から見つかったものです。決して多くはないのですが、ひとつ特徴を挙げれば、お城ですから武器・武具、刀とか矢じり、鎧などが出てくるのかと思えば、そうした遺物は一切ありませんでした。特に鉄でできたものは短い釘が 2 本あっただけです。遺物のほとんどは土器・陶磁器のかけらです。それは地元でつくられた素焼きのお皿や土鍋のほか、中国産の青磁・白磁の碗など高級な焼物まで出てきました。時期的にはだいたい 15 世紀後半から 16 世紀初頭にかけて、いずれも生活の道具ですが、高級な陶磁器は使う人物が限られてしまいます。

もうひとつ大きな特徴があります。小さなかけらですが茶壺の破片が出てきました（図 21）。瀬戸で焼かれた、やはり 15 世紀頃の祖母懐茶壺そぼかいというものです。ということは標高 900 m を超す山の中でお茶をたしなんで暮らした人がいた、そういうことになってしまうのです。非常に面白い結果です。

そしてここからは若干考察的な話になりますが、あらためて石積みをもう少し見てみたいと思います。殿村遺跡で 15 世紀の石積みが見つかりました。その石積みは大きな自然石を衝立のように立てて背後に裏込め栗石がない。こういう非常に初歩的な、石をまったく加工せずに用いる古い技術の石積みです。これが殿村で見つかった 15 世紀の石積みの特徴です（図 22 左）。そして虚空蔵山、水ノ手の平場群で見つかった石積み、中ノ陣の石積みもほぼ同じですが、まず石を割ったらしい。もっとも本格的に鉄の矢などを打ち込んで割ったわけではないと思いますが、ある程度塊の石を割って、あるいは割れて平たくなった石を選んできて積み上げています（図 22 中）。どちらかという石の長い側面を見せるので、奥行きすなわち控えはそれほど長くないのですが、そうした石材をまっすぐ垂直に積み上げていく。そのうえ今回の調査ではアゴ止め石と呼んでいものが土台の石が前にせり出して据えてある。また、さらに面白いことに、通常は隠れていて見えないのですが、補強目的でしょうか、石積みの後ろに控え積みとでも言うべきもう一つの石積みをつくる場合があることが分かってきました。

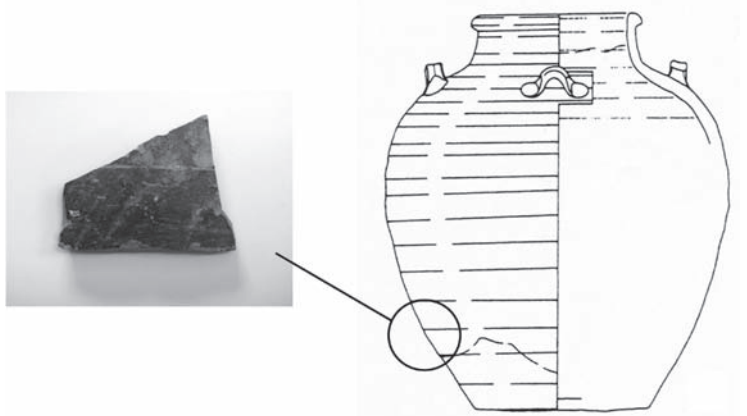


図 21 祖母懐茶壺

しかし虚空蔵山城に見られるこうした石積

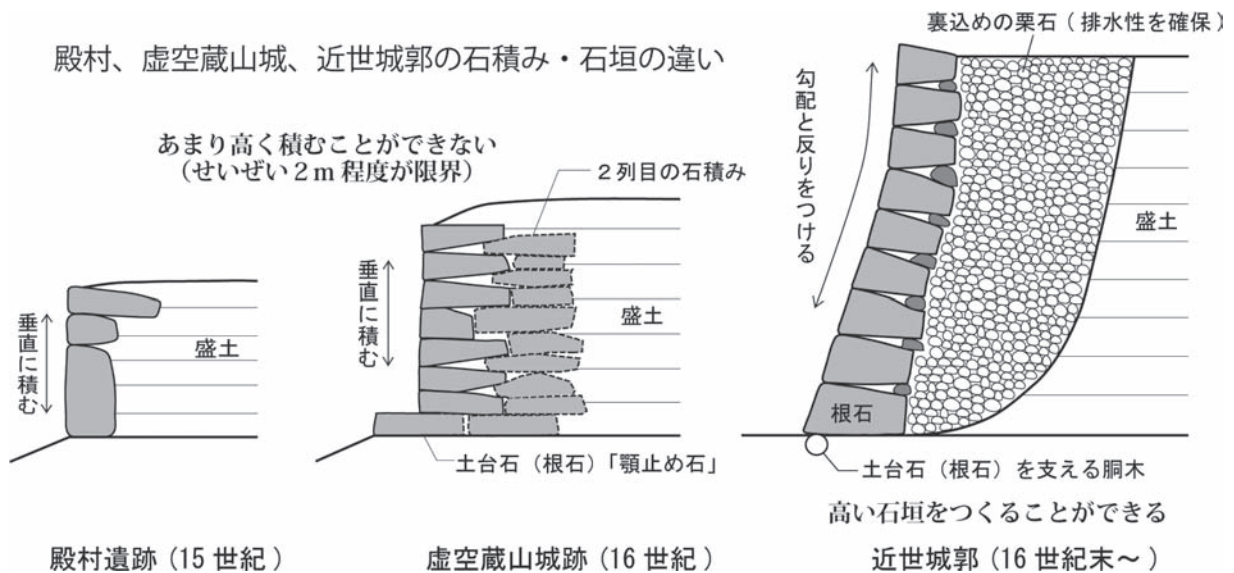


図 22 石積み・石垣の構造を比べる

みも、石を垂直に積んでいくため高さが稼げないことや、後ろ側に^{ぐりいし}栗石を入れていないという特徴から構造的に弱く、どちらかといえば殿村の石積みに近い未発達な技術です。しかし両者には数十年という決定的な時間の差が横たわっています。もっとも、虚空蔵山城をはじめ松本平の石積みを伴う山城の石積みの築造年代を、発掘調査などで考古学的に証明する機会はまだほとんどありませんので、松本地方の石積みを伴った山城がすべて同じ時代のものなのか、それとも少し時間幅があるのか、実はまだ分かっていないのです。いずれにしても殿村遺跡と虚空蔵山城の間には時間の差があります。果たしてこの15世紀の石積みの技術が、16世紀の山城の石積みの技術に継承され発達したのか、それともまったく別の技術に由来するものなのか、そこは大きな課題になってきます。一つ言えることは、松本城もっと広く言えば安土城以降の近世城郭に見られる、背後の裏込めの構造とか石に傾斜をつけて反りを入れる積み方(図22右)とは技術上決定的な差があると言えます。

ところで15世紀の石積みですが、以前から中井均先生が指摘されていたように、どうやら15世紀代の石積みは寺院跡に伴うものが大半で、文献記録などからみても石積み技術の発展というのはまずお寺、宗教勢力の保有する技術から始まっていて、16世紀以降にいくつかの地域で城郭に取り入れられていった、それを総石垣の城として開花させたのが織田信長の安土城ではないか、そのようなことが言われているのですが、城郭以前の15世紀にさかのぼる石積みが東日本の松本から見つかったということの意義は大きいのではないかと思います。これが最初に見つかった時、私たちは東日本唯一というような言い方をしましたが、最近では山梨県や栃木県などでも15世紀にさかのぼる可能性のある石積みがいくつか見つかってきています。東日本でも古い時期の石積みが見つかりはじめてきました。今後、各地におけるお寺や山城の石積みがどのように出現し発展していったかということが大きな研究テーマになっていくと思います。今回の調査成果がその一つ材料になっていけばと思います。

話を戻します。先ほど表面の石積みの後ろにも控え積みのような石積みがあるものがあると言いました。これは実は虚空蔵山だけではなくて、よく見ていくと桐原城の副郭にやはり後ろに隠れている石積みが見え出している部分がありますし、山麓の蓮法寺跡でも石積みの崩れかけたところで裏側の石積みが見えています。そして筑北村の青柳城^{あおやぎ}にあります見事な石積みにも一番端のところを見ると後ろ側に潜んでいる石積みがわずかに顔を出しています。このような技術はどうも虚空蔵山城だけではなくて松本平の山城の石積みに普通にあったのかもしれませんが。加えてアゴ止め石については、虚空蔵山城で今回はじめて確認したのですが、そういう視点で見ると、中山の考古博物館のすぐ裏手^{はいばら}にある埴原城の主郭の石積みに

も同じように顎を出した土台石が残っています。どうも山辺谷や松本市域の中心に展開している山城にもこういう技術はあったのかもしれませんが。

そのアゴ止め石という用語が初めて命名されたのは群馬県の太田金山城^{かなやま}です。ここでは整然としたアゴ止め石が見られます。同じように東京都の八王子城でも、こちらでは地覆石と呼ばれているようですがまったく同じ構造があります。確かに土木工学的には虚空蔵山のものも同じような効果が得られたのだと思いますが、上に積まれている石積みの技術はまるで



図 23 虚空蔵山城における石積みの分布

異なるので、両者に何らかの技術的な交流があったのか、年代的にはやや近いものがあるのでしょうかまったく分かりません。まだ太田金山城とか八王子城のアゴ止め石というものの自体、後北条氏の城というだけで、いつどこで発生した技術なのかははっきり結論づけられてはいないようです。各地のこういった石垣・石積みを比較研究していく中で、それぞれの地域の中で生まれて発展した技術なのか、それとも戦国大名などが持っている技術が拡散していったものなのか、そういった点がこれから課題として出てくるのでしょうか。そうした情勢の中で、私たちとしては松本という地域の中で考古学的な調査を積み重ね、当地においてどういう発生、展開、終末があったかという過程を明らかにしていくことが求められています。

最後に水ノ手の平場群とは何か、いったいどんな所だったのでしょか。まだまだ結論は出ませんがもう一度宮坂先生の縄張図をもとにこの場所を見ていきたいと思えます（図 23）。図の中央よりやや左下に私たちの掘った平場群があります。その両側に秋吉砦と中ノ陣城があります。そして水ノ手の平場群から上の方、春先に歩いている時発見したのですが、秋吉砦の上の方の曲輪と中ノ陣の尾根の上の方の小さな曲輪を結ぶように、石積みで縁取られた道がつながっていることが分かりました。図中で道と示した部分です。要するに道で連絡している軍事的な施設に水ノ手の平場群が囲まれているという、この位置関係が今後この遺跡の性格を考えていく上で重視しなくてはならない視点です。しかも黒い太線で強調した所は中世の石積みが残っている平場です。ご覧いただくと分かるように中ノ陣や秋吉砦、あるいは峯ノ城など、主要な施設にしか石積みは見られない、どこにでもつくられるわけではないのです。そういう中でこの平場群では 6 段、さらにその下の斜面のところも含めると 7 列の、しかもしっかりと長い石積みが伴っているのです。

ふつう山城の石積みといえば限られた場所、例えば主郭^{しゅかく}の部分ですとか虎口^{こぐち}の部分など、どちらかといえば要所だけに限定的につくられることが多いのではないかと思うのですけれども、そのような中であってこの水ノ手の周辺だけは非常に贅沢に石積みをつくっている。それはやはりここがいかにか重要な場所だったかということを示しているのではないかと思います。そして平場からは先ほどご覧いただいたとおり茶道具を含めた高級な陶磁器が、それも生活の臭いが漂うものばかりである、そこにこの場所の謎を解くヒントがあるのではないかと考えます。ここをお城と呼んでいいものか、呼んではいけないのか、それはまだ今回の発掘成果だけでは言うことができません。ただいづれにしても、生活遺物を伴う何か特別な目的をもった空間であった、そこまでは今回の発掘や周辺の踏査を通じて抱いた感想であります。

以上、駆け足で調査成果の報告をさせていただきました。これから先は笹本先生から広がりのあるお話を伺いたいと思えます。ありがとうございました。

殿村遺跡とその時代—虚空蔵山城と中ノ陣城から見た戦国時代—

信州大学副学長 笹本 正治

謎は深まる

みなさんこんにちは。信州大学の笹本正治です。

先ほどの竹原さんのお話、非常に面白かったですね。お話を伺って、この講演をするにあたり改めていろいろプレッシャーを受けました。にもかかわらず、大変忙しかったものですから、内容をしっかりと練ってきておりません。このため、みなさんのお顔を拝見しながら、適宜話をさせていただこうと思っています。

先ほどの報告を聞いて、みなさんは殿村遺跡がどういうものだと結論が出ましたか。話を聞けば聞くほど遺跡の性格が分からなくなりますね。実のところ、発掘をすればするほど謎が深まるというのが実態です。私は最初、殿村遺跡で会田氏の館跡が発掘された、しかも日本で一番古い石垣が出てきた、という話を耳にして、自ら見学にやって来ました。

その時に私が興味を持ったのは、堀からたくさん出てきた箸といわれたものでした。箸が堀に捨てられたという理解ですね。食事の道具である箸だけが堀、すなわち水の中から大量に出るといのはおかしいですね。その時に私は箸でなくて齋串^{いぐし}ではないかと思ったのです。齋串とは、榊や笹などの小枝に幣^{へい}をかけて神に供えるもので、ここから派生して、物を刺す木や竹の串の総称のことです。つまり、神様や仏様に捧げるため、この箸状の上に御幣が付けられたのではないかと思ったのです。皆さんもご存じのように御幣は祭祀に際して神様に捧げるために、2本の紙垂を竹または木でできた幣串に挟みます。

これまで言われてきたようにあの石垣のすぐ背後に居館が設けられていたとしたら、堀の内側には土塁と呼ばれる土の塀など防御用の施設があって、簡単には居館の中には入れないようになっていたはずですが、土塁の跡は見つかっておらず、すぐ近くに建物の跡と思われるものが出ています。

会田氏館跡と呼ばれてきた遺跡の実態は何か？これまで、教育委員会は館と呼ばれていた大地を発掘してきましたが、分からないことばかり、課題ばかりが出てきたのです。今回の発掘においても、成果としての事実はいっぱい出てきているのですが、理解をめぐって右往左往している状態です。

私たちは研究を通じて、分かることよりも理解できないことが増えていきます。それでも、発掘成果をもとにして分かったことをまとめながら、自分なりにかつての姿が浮かび上がるような一枚の絵を描いていきたいと思うのです。それを通じて私たちのふるさとはどういう場所で、いかなる歴史を持ち、将来どうなったらいいのだろうか。契機になれば幸いです。

ですから、これから私がする講演の内容などについて、ただ事実を知っていただくだけでは将来につながりません。みなさん一人ひとりが事実を知り、さまざまなことを考えて、よりよい未来づくりにつなげていくことが大事です。そのための素材として、城や館、宗教施設などがなぜ必要だったのか、それはいったいどういう意味を持っているのか、こういったことをみなさんの未来のために、お子さんやお孫さん、そして100年、200年先の人たちのために、考えていただけたら幸いです。

美しい会田

最初に見ていただきたいのは私が撮影した、美しい私たちのふるさと会田の風景です（口絵1-1）。背後に控える虚空蔵山からはじまって、会田地区の中心部分に至るまで、美しいですね。この素晴らしい私た

ちのふるさとを点として考えるのではなくて、面として考えてみたらどうでしょうか。背後にある山容の綺麗な山、そして私たちのすぐ近くに広がる水田、この写真に写る景観を私たちは美しいと思うはずで、みなさんも美しいと考えるのでしたら、私たちの心の内にある美しさの評価基準は何なのか、そういったことをも少しずつ気に懸けていただければと思います。

古図に見る会田

今回、殿村遺跡の発掘に伴って、発掘担当者たちは改めてこの地域の歴史を考えてみよう、そのためにどういった材料があるのかと、地元に入り古文書や伝承などを探しました。その結果、いろいろなものが出てまいりました。

次に見るのは、文禄3年（1594）、ですから関ヶ原合戦よりも7年前に描かれた、「会田郷往古之略図」と題された古図です（図24）。残念ながら、これは原本ではありません。近代に写されたものですが、これが作られた1594年に、こうであったということを「後世のために記し残し置くもの也」と、左側に書いています。つまり、400年以上前の人たちが、将来どういふことを考えるか分からない私たちのために、当時の状況を書き残しておいてくれたものなのです。

図を見ると、虚空蔵山からはじまって集落の状況など、私の撮った写真と景観がよく似ています。写真と同じように虚空蔵山の一番高い所には「鎮守虚空蔵尊^{ちんじゆこくぞうそん}」と記され、上部に鳥居が記されています。その下に「城廓^{でまる}」と書かれていて、その左下には「出丸」も描かれています。「城廓」の右側には「會田小次郎廣政本城也、本姓滋野^{しげの}という、この地に参り、會田と改めし者なり」と注記されています。

今私たちが問題にしている「殿村」の西にはL字型の堀のようなものがあります。この堀の形態はこれまでの発掘の結果とは合致しておりませんが、わざわざこういうものが描かれているということが重要です。しかも、その前には大きな鳥居があります。

記されたそれぞれの記載内容は非常に面白いものです。例えば、中央の「人埋堂」と記されている左上に「この堂は軍人の死人也、また百姓の死体を埋める地」と書いてあります。死体を埋めた場所だと説明がついているわけです。

今回の話に関わる場所については、虚空蔵山の「城廓」と書かれた右側に「會田小次郎」の名前が記されています。その南側、殿村との間に「知見寺」も出ております。この周辺を詳しく見ると、「小岩井庄」、「殿村」、「岩井堂」、「合田郷」などがあります。殿村の右側には、「大手門を改め大門という」とあります。大門というのは、ひょっとすると宗教施設の大門の意味かもしれません。このように、この図はいろんなことを考えさせてくれます。

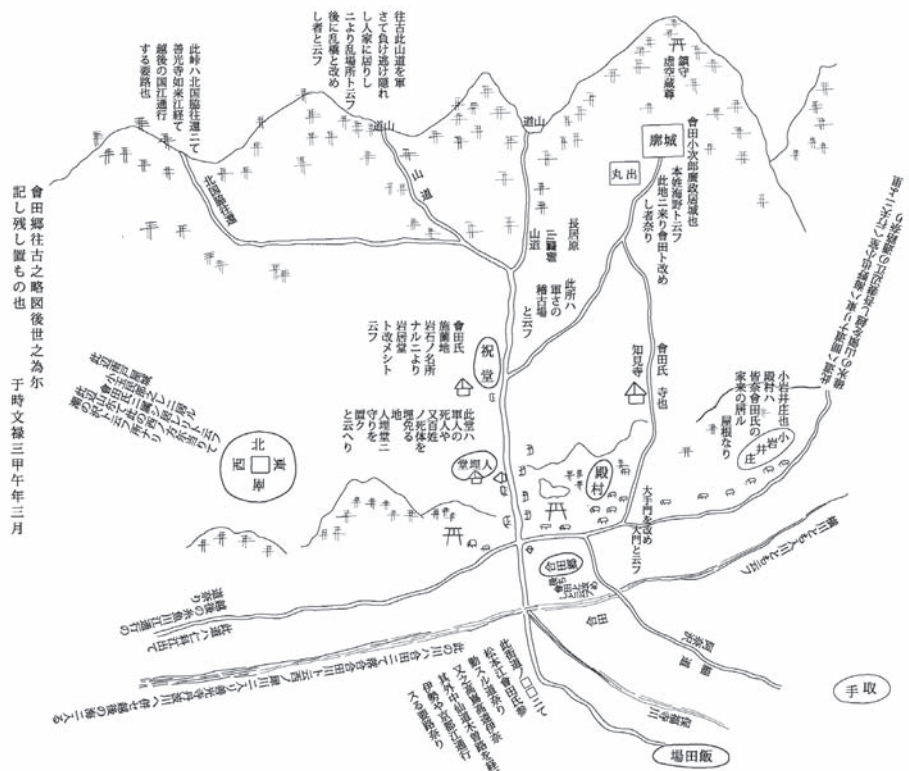


図24 文禄3年「會田郷往古之略図」（写しをトレース）

ちなみにこの図の中の文章の書き方は、中世にさかのぼる可能性があります。というのは、ひらがながいっぱい用いられています。埋めるという部分でも、わざわざ埋めるという「埋」の字の下に、免ずる「免」の字を書いて「め」と古い形の平仮名書きがされ、その下に「地」というふうに、全体の書き方が古いのです。

会田岩下氏

城郭に関係した部分に出てくる会田小次郎広政ですが、一般的な説明によれば小笠原氏に属した会田岩下氏は信玄に降ったといえます。つまり、彼が生きたのは武田信玄の生きた時期と重なっていたようです。

山梨県に残る記録その他によれば、天正 10 年（1582）の武田氏滅亡時には、岩下惣六郎昌盛、右近昌延が殉死しました。そして、7 月に小笠原貞慶が旧領の経略にとりかかっても、会田岩下氏と家老の堀内氏は小笠原氏に降らず、上杉景勝を頼りました。

武田信玄が攻めて来た時、信濃国の守護、この地域の最も上にいた領主は小笠原長時でした。長時は武田氏に追われてから、あちらこちらを転々としてきました。ところが武田氏滅亡の時に、その子である小笠原貞慶は、徳川家康の援助によって信濃府中（現在の松本市）に帰って来ようとしてきました。その時、私たちのふるさとにいた会田氏は、小笠原につかず上杉氏の方に味方したのです。これは興味深いですね。

武田氏滅亡後、現在の松本城にあたる深志城をとったのは、織田信長と結んだ木曾義昌でした。ところが、織田信長が本能寺の変で没すると、木曾義昌は後ろ盾がなくなり、この地域は上杉氏、それから小笠原氏の背後にいる徳川氏、木曾氏の背後についた豊臣氏、さらには北条氏がねらうのです。天正 10 年以降、日本で一番激しく取り合いが行われそうな場所が、会田を含めた松本平なのです。この一連の戦いに際して会田氏は上杉に味方し、当主の会田小次郎広政が幼少であったため、家老の堀内越前守が中心になって四賀地区の矢久の砦で小笠原氏と戦いました。11 月に矢久の砦が落城し、小次郎は青木村まで逃れたものの自刃し、会田氏は滅亡したとされています。多くの方は戦国時代というと武田信玄、上杉謙信の時代のイメージが大きいのですが、この地域については謙信・信玄より後の時代の方が面白いのです。

知見寺と廣田寺

もうひとつ、この地域を知る鍵になるのは知見寺です。現在、私たちのふるさとを代表する素晴らしいお寺に廣田寺があります。私は四賀に来るたびに廣田寺にちょっと寄って「いいなあ」と思っています。

「会田郷往古之略図」に見える知見寺というお寺は、会田氏の菩提を弔うため現在地に伽藍を移した廣田寺の前身で、会田の岩下氏により中興されて、東の山を越した知見寺沢にあったとされています。小笠原氏に寺を焼かれて、住職が岩下豊後の位牌を持って逃れ、知見寺を廣田寺として再中興したと傳承されています。なお、廣田寺については、里山辺の広沢寺の 4 世が開山したという説もあるようです。

いずれにしろ、この寺ができたのは戦国時代ということになります。ともかく、この会田地域においては会田氏の存在が全面に出てまいります。会田氏の館跡と傳承されてきた場所には、先ほど見ました鍵形の池あるいは堀ともみられるものが描かれています。

地域の城数

最初に出した写真(口絵 1-1)をちょっと思い出して下さい。私たちが忘れていけないのはこの風景です。私たちのふるさとで大切なのは、この虚空蔵山が控える全体としての風景なのです。虚空蔵山には「鎮守虚空蔵尊」が祀られています。つまり、山全体が基本的には宗教施設です。

皆さんは戦国時代に四賀地区にどれくらいの山城があったと思いますか。一応ここに 10 の山城をあげておきました（図 25）。みなさんはこの数の多さにびっくりしませんか。私はよく学生に「長野県全体でお

城がどれくらいあると思いますか？」と尋ねるのですが、多くの者は「10以下です」と答えます。「ではあなたのお城のイメージはどんなですか？」と聞きますと、松本城のイメージなのです。つまり石垣の上に天守閣を構えるお城です。ですから、松本城の次は小諸城、松代城などといって数えるので10以下になるのです。しかし、四賀地区だけでもこれだけあるのですから、中世に現在の長野県域にあった居館・山城の数は、おそらく3000近い、もっとあるかもしれないほど多数なのです。

近世の松本城のような、石垣の上に天守閣が築かれたものだけがお城ではありません。中世には、一つの集落に一つのお城がある方と考える方がいくらかの数なのです。江戸時代の村だったら必ず一つはあるのが鎮守、氏神です。山城は村の氏神さんと同じくらいの数を持ち、同じような役割をしていたのがというのが、私が考えている山城像です。

虚空蔵山城をめぐって

特筆すべきは、一般的に会田城あるいは虚空蔵山城と呼ばれている城です。標高1139mの虚空蔵山南面の山腹に、中ノ陣城、秋吉城、うつつ城などが設けられています。これを全体として一つの城と見るのか、それとも一つひとつが独立した城とみるのか、これによってそれぞれの城の性格も役割も違ってきます。私たちはこのことすら、まだはっきりイメージができておりません。

次に見ていただきたいのは、長野県で最もお城を歩いている宮坂武男先生が、かつてのイメージはこんなふうだったのだらうと描いてくれた、虚空蔵山城の概念図です(図26)。一番上の峯ノ城から始まって今問題になっている中ノ陣城、秋吉砦、そして今回発掘された場所が描かれています。もしこの通りだとしたら、想像を絶しませんか。私たちの目の前に見える虚空蔵山の尾根は、すべて先祖が手を入れて地形を変えているのです。人間が山のすべて手を入れ、大地に刻みを入れている。



図26 虚空蔵山城の概念図(宮坂武男氏画)

四賀地区の山城

- 1-鷹巣根城(錦部) 苅谷原五郎の築城と伝えられる。別称・苅谷原城
- 2-見場城(錦部)
- 3-七嵐城(錦部) 『高白斎記』(武田信玄の家臣が書いた日記)に見える
苅谷原の城。太田氏の城。別称・荒神尾城
- 4-保福寺城(錦部)
- 5-会田城(虚空蔵山城) 虚空蔵山(標高1139メートル)の南面山腹に中の陣城・秋吉城・現城などが配置される。
- 6-召田城(中川)
- 7-矢久の城(中川矢久) 覆盆子城
- 8-岩淵城(中川藤池)
- 9-笹沢城(五常落水)
- 10-山笹城(五常西の宮)

図25 四賀地区の山城

ら、想像を絶しませんか。私たちの目の前に見える虚空蔵山の尾根は、すべて先祖が手を入れて地形を変えているのです。人間が山のすべて手を入れ、大地に刻みを入れている。

それなら、これほど手を入れなければいけない理由はいったい何でしょうか。私たちはそこから何を読み取らなければいけないのでしょうか。

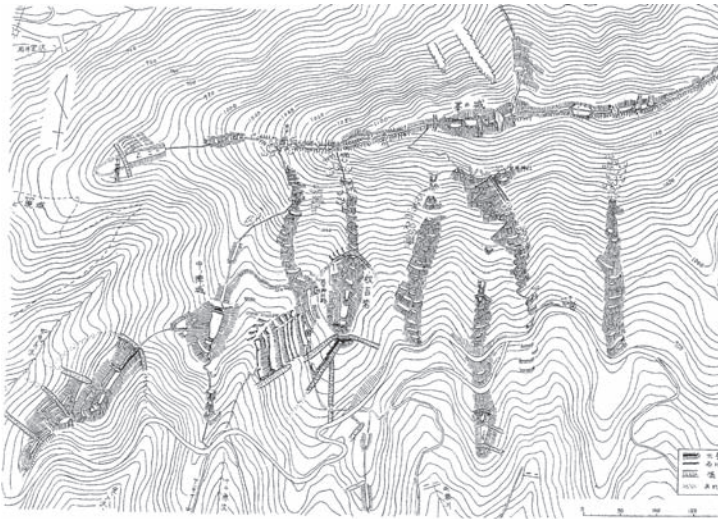


図 29 虚空蔵山城縄張図 (宮坂武男氏作図)

図からしても、虚空蔵山の尾根という尾根はすべて人の手によって改変されていることは間違いありません。

みなさんちょっとご協力ください。虚空蔵山の山頂まで登ったことのある人は手を挙げて下さい。すごいですねえ、こんなにたくさんの方が登っているのですか。私は岩屋神社の方向からだと大変なので、あまり登りたくありません。ただし、松本市教育委員会の人たちは仕事熱心でして、もう二度と登りたくないと言っても、また登らされるでしょうね。

気がついた方がいらっしゃると思いますけれども、

虚空蔵山の頂上は平らになっています。自然の山はこのように平らではありません。山頂で確認しますと、きちんと人の手が加わって、テラスになっているようです。しかも、その東端で尾根にわざわざ堀切ほりきりを入れています。頂上の平らが一番大事な守るべき場所であり、東側から攻めて来られると危ないと思って、対応したのでしょう。ですから、東側には防御のためにいくつも堀切が掘られています。あの狭い尾根がお城として機能するように、たくさんの堀切を入れているのです。

ところで山頂に行ってみた人で、あそこで生活しようという人はどれくらいおられますか？ 1週間生活してもいいぞという人がいたら、手を挙げてください。誰も手を挙げないですよ。あそこに逃げこんでも、長期間の生活はできません。下まで水を取りに行くだけでも大変です。山頂に逃げ込んでも長期間の戦いの継続は不可能ですから、峯の城に入ったらもう戦争する気がありませんと言っているようなものです。その下の方に、中ノ陣や秋吉砦のようなものがいくつか展開されています。

私はおそらく峯ノ城が一番古いお城だろうと考えています。それは峯ノ城と呼ばれるように、虚空蔵山の頂上にあることが意味を持つと考えるからです。

宗教ゾーンと城

この講演を聴いての帰り、周囲に誰もいない道端に 1000 円札が落ちていました。この 1000 円をどうするか、みなさん全員目をつむって想像してみてください。黙って持って帰るという人は手を挙げてください (挙手)。あまりおられませんね。さすがに四賀の人たちは道徳心がありますね。次に、そのままにしておくという人は挙手してください (挙手)。1000 円程度には目もくれない裕福な人が何人もいますね。3 番目、警察に届けるという人 (挙手)。あれ、一度も手を挙げなかった人が何人もおられますね。

じゃあもう一度聞きます。今度は二つだけ、警察に届けるか黙ってポケットに入れるかで選んでください。みんな目をつむったままでいてください。そっとポケットに入れる人、手を挙げてください (挙手)。素直な人たちですね。警察に届ける人 (挙手)。素晴らしい人たちですね。

最後にもう一回だけお尋ねします。そっとポケットに入れると考えた人だけまた手を挙げて下さい (挙手)。そのまま手を挙げていて下さい。善光寺の中に 1000 円札が落ちていました。あるいは、廣田寺の境内に 1000 円札が落ちていました。それでもそっとポケットに入れて自分のものとする人は手を上げ続けていてください。わずか二人とおそらく先ほどの人数の 10 分の 1 以下になってしまいました。普通の場所に落ちていたら持ち帰る人も、寺の中ではほとんど自分のものにしないのです。

宗教施設の中では私たちは行動の仕方が違ってくるのです。一般的に宗教施設の中では泥棒や、乱暴する

人の数が圧倒的に減ってきます。逆に言うとお城も、信仰施設の中に入ってしまうと、敵から手出しはされない可能性が大きくなります。日本のお城には神様の名前がついているのがたくさんあると思いませんか。これは神に守ってもらおうという意識とともに、かつて聖域だった場所に城が設けられたことを示すのではないのでしょうか。

もともと宗教の場だったところにお城を設けるとすれば、それは何のためでしょうか。城を築くのは安全を確保してほしいからですよ。戦うための道具だったら、あんなふうの高い山の上に、防御主体でつくりませんか。中世は現代と異なって、はるかに人びとの神仏に対して帰依する心が強かった時代です。そんな時代において自分たちの安全を守ろうとする場合、宗教施設の中に入って、ここで人殺しをすると神様仏様が見ていますよ、神仏の前で人を殺すような行為ができるのですかと、敵を脅しながら安全を確保することが考えられます。

山城の中にも、宗教などを前提にして安全確保をしたいものと、本当に戦うために築かれたものなど、多様性があるようです。

『信府統記』の虚空蔵山城理解

松本藩の殿様の命によって編さんされ、享保9年（1724）12月に完成した、『信府統記』という本には、小岩井村の秋吉の古城地が村より北北東の14町の所にあると書いてあります。「中野陣古城地」の記載もありますが、今の書き方と違い、「ノ」は「野」の字が用いられています。小岩井村より丑寅の方向、すなわち北東の14町ほどの地に、城があると書いてあります。

「會田虚空蔵山古城地」は会田町より丑寅の方向1里4町18間の地です。ここには、「本城の平（東西二丁、南北八間）、石垣二段あり。城主会田小次郎広正居住せり」と説明しています。さらに、「会田氏の先祖は海野幸継の二男、初めてここを分領して会田次郎と号す」などと続けています。

武田信玄に服属してから、その後の小笠原貞慶の時期に至るまでの会田氏について、江戸時代の理解が『信府統記』には説明されているのです。

保福寺の番所

もう一度、私たちのふるさとの歴史を考えてみましょう。武田信玄が攻めてくる前、応仁元年（1467）12月14日に会田の岩下海野満幸が村上氏と海野の地で戦って討ち死にしました。村上氏というと、後に武田信玄を2度までも打ち破ったことで有名な村上義清で知られますが、信州における小笠原と並ぶ二大勢力の一つでした。会田の岩下氏はその村上氏と戦ったことがあるのです。

文亀2年（1502）頃に保福寺城が築かれたようです。

永正10年（1507）には、小笠原長棟が保福寺に番所を置いたとの説明があります。番所というのは通行者や荷物などの検査を行い、税の徴収などを行う役所です。ということは、番所を置くと相当な関銭が入るくらい、保福寺は交通の要衝で、多くの人が行き交う宿場だったといえます。番所を設けた小笠原長棟という人物は、現在の松本市里山辺林に館と山城を築いた信濃守護でした。

小笠原長時と武田信玄

天文17（1548）年7月19日に有名な塩尻峠の合戦が起きました。この合戦は、諏訪を取った武田信玄が甲斐に戻ったので、小笠原長時が画策して諏訪でいろいろな混乱を起こさせたことから始まりました。この情報を得た武田信玄は、ゆっくりと時間をかけて信濃に軍を出し、1週間くらいかけて甲斐から信濃に入りました。合戦の前日に武田軍はまだ茅野にいたのですが、19日の朝6時ごろ塩尻峠に陣を張っていた長

時勢を急襲しました。これまでゆっくりした動きをし、まだまだ遠くにいると考えていた武田軍が、まさか早朝に攻めてくるとは思わず、小笠原方は油断して寝ぼけ眼で戦って、大敗を喫しました。これが大きな契機になって、小笠原氏は松本平を去って行くという流れになります。

江戸時代に書かれた『二木家記』によりますと、この時小笠原長時の軍には荻谷原氏、つまり四賀地域の人たちが参陣していたようです。

その2年後の天文19年、信玄が小笠原長時を林城で破りました。この時も小笠原氏の味方の中に荻谷原氏が入っていました。このこともあって、天文19年8月10日(1550年9月30日)に武田軍が会田岩下に出陣したのです。小笠原長時は10月23日に村上義清の支援を受けて平瀬城に入りました。

それから3年後の天文22年(1553)、信玄が荻谷原城主の太田長門守を生け捕りにしました。この年の4月3日、信玄は会田虚空蔵山に放火して、荻谷原も城割をして^{しろわり}^{くわだて} 城割をして^{くわだて} 城割を行いました。刈谷原にあった城を壊す儀礼をし、武田氏用の城につくり替えたのです。

荻谷原城と城割

荻谷原氏は相当大きな勢力を持っていました。信玄は荻谷原の城を手に入れると、わざわざ城割をしたことが注目されます。

城割の意味を分かりますか。今はどうか知りませんが、昔は家を潰す時にいろいろな儀式を行いました。例えば、今から35年ほど前、私の山梨の実家を建て替えた時に、トイレ、昔は汲み取り式のトイレでしたが、それを埋めるためおまじない的な儀式をしました。今でも井戸を埋める時には竹の節を取って、井戸が息をできるようにと儀礼をして埋めます。

お城といえども、生命を持つと中世の人には考えられていたのです。お城には築いた人の魂が分与されていると考えられていましたので、前の領主が使っていたお城をいったん壊して、前の城主との関係を断ち切るという儀礼をしたのです。それを城割と言います。松本市内の山城を歩きますと、出入口が必ず壊されています。あれはおそらく城割の結果でしょう。家でもそうですが、一番大事なのは出入口ですから、そこを壊して、城の生命を絶ったのです。

その上で、武田信玄は城割ということをしています。天文22年にわざわざ荻谷原において、古いお城の命を奪った上で、新しいお城をつくる時の儀礼を行ったのです。このようなことをしているのは、荻谷原がそれだけ重要だったことを示します。ところが、虚空蔵山の方では火だけをつけて、同じようなことをしていません。

信玄は天文22年に荻谷原の地を海野氏に与えようとしたのですが、当時荻谷原城主だった今福氏から同意が得られませんでした。同年には信玄が平瀬城を破却して、海野下野守を深志に招いて、新村の地300貫を替地として与えました。本来荻谷原において渡そうとした土地の代わりにこの時に渡したのです。深志というのは、深志城のことで、現在の松本城です。

天文22年に上杉謙信軍が会田虚空蔵山城を攻め落としました。興味深いのは松本のすぐ近くでありながら、会田の地が武田と上杉の勢力との境目だったことです。

日本きっての係争地

先ほども触れましたが、大事なのは武田氏の滅亡後のこの地域の歴史です。天正10年3月20日(1582年4月22日)、木曾義昌が織田信長から^{あずみ}^{つかま} 安曇・筑摩郡を加増されました。木曾の福島を根拠にしていた義昌は、信玄の娘を妻としていましたが、勝頼を裏切り織田氏の方について、武田氏滅亡の原因をつくりました。その戦功として、木曾義昌は信長から安曇・筑摩両郡を与えられたのです。

ところが、天正 10 年 6 月 2 日（1582 年 6 月 21 日）、本能寺の変で信長が死んでしまいました。これによって、わずか 3 ヶ月足らず前に織田氏の勢力下になったばかりの旧武田領国は大きな混乱に陥りました。かつての領主たちは旧領を回復しようと動きました。その一人である小笠原長時の子供の貞慶は、6 月 12 日に信府に帰ってきて、^{ごちよう}後庁勘兵衛に忠節を促しました。後庁氏は現在の塩尻市、朝日村等に勢力を持っていて、武田信玄によって滅ぼされた三村氏の子孫でした。

7 月 2 日に小笠原洞雪斎（貞種）、この人物は小笠原貞慶の伯父さんですけれども、彼が上杉景勝の支援を得て深志城から義昌を追い出しました。義昌の次に深志城を取ったのが小笠原洞雪斎なのです。ですから、実質的には上杉氏の勢力が深志城を押さえたのです。

この後、7 月 5 日に徳川家康の家臣である榊原康政は深志城調略について後庁勘兵衛尉の来府を求めました。7 月 10 日には小笠原貞慶が深志城を回復しようと、恩賞をもって百瀬石見守を誘いました。このような下工作の末に、貞慶は 7 月 15 日にやっと深志城から洞雪斎を追い出しました。これを契機にして貞慶は次第に松本平で勢力を持つようになるのです。

11 月 5 日、会田氏が上杉景勝の支援で矢久城に立て籠もりました。この地域は決して小笠原氏の言う通りにはなっていないのです。ところが、この 5 日に小笠原貞慶軍が攻め込んできて、城将の堀内越前守が討ち死にし、矢久城は落城しました。

翌年、小笠原貞慶の家臣である赤沢式部少輔・^{ふるまや}古厩因幡守・^{どうのはら}塔原三河守が謀反を企てましたが、2 月 12 日に貞慶は式部少輔を自殺させ、ついで因幡守・三河守も誘殺しました。

天正 12 年 3 月 18 日（1584 年 4 月 28 日）には、小笠原軍が上杉方の青柳城（筑北村）を攻めて城将を追い出しました。この日、上杉景勝は海津城の上条宜順などに青柳城将を支援するよう命じ、4 月 21 日上杉軍が小笠原軍を麻績城（麻績村）で破りました。

つまり、天正 10 年から 12 年くらいまでにかけて、この地域一帯は小笠原対上杉の戦いの場になったのです。小笠原の背後には徳川家康が控えていました。こうなると黙っているわけにいかないのが、正式にこの地を得ていた木曾義昌です。義昌は当時最も勢力を持っていた豊臣秀吉と結びついて、他の勢力に対抗しようとしていました。

こういう状況がすべて終わるのは天正 18 年（1590）です。同年 1 月 9 日に豊臣秀吉は上杉景勝に援軍を送ることを手紙で知らせて、小笠原貞慶との戦いをやめさせました。同年 3 月から 7 月にかけて小田原征伐が行われ、戦後家康は関東に移封となり、信濃の多くの領主がこれにしたがいました。

私たちが考えなければいけないのは、この地域が私たちの思う以上に豪華キャストによる戦いの場となった事実です。武田信玄対上杉謙信の戦いは、所詮山梨県対新潟県といったレベルの戦いです。これに対して天正 10 年の戦いは、北条氏が佐久郡を取りますので北条氏政は出てくる、上杉景勝は出てくる、豊臣秀吉は出てくる、徳川家康は出てくると、戦国が終わろうとする頃、日本全体を押さえる最後の豪華キャストが勢揃いしてこの地域で小競り合いを繰り返していたのです。

大規模なテラス

さて、私が興味深く思っているのは中ノ陣城の東側の、先ほど報告があった発掘の結果です（図 30）。しかしながら発掘成果は、分からないことばかりです。

もしあそこが城の中だとしたら、少なくとも何年か使われていたはずですが。継続的に使われた城なら、どういう建物が作られるのでしょうか。発掘の結果は、一度しか使われない掘立柱の建物が出た程度でした。よそのお城の発掘を見た経験のある人なら、きっと柱穴の少なさと、発掘品の乏しさにびっくりすると思います。大規模なテラスを造成しながら、そこには建物が 1 回ちょっと建てられただけなのです。しかも、

掘立柱の建物ですから、せいぜい小屋です。これだけ大規模に石垣を積んで造成しているながら、その平では1回小屋がつくられて終わり。これはいったいどうしてなのでしょう。

石垣について

次に、問題となっている石垣を見ましょう（図31）。最下部には石垣のならばより前面に出よう石が置かれ、その上に石が積まれています。下の石の配置によって石垣が前の方にせり出さないようにしているのです。ただ石を直角に積み上げていったら、石が滑って、あるいははらんで、崩れてしまう。だからまずは最下部の石をこれから積む石が滑らず、せり出さないように配置して、その後ろ側に石を積んだのです。

でもよくよく考えてみてください。これはプロが積んだ石垣なのでしょう。石がいっぱいある所だったら、これくらいは私でも考え、実施すると思うのですが、いかがでしょうか。石の使い方を見ると、上に大きい石を置いているにも関わらず、その下の石は小さい。普通なら石垣を安定させるために、下の方に大きな石を置いて、上の方には小さな石を置きます。石垣作りのノウハウをあまり理解していないように感じるのです。現場に行っただけであれば分かりますように、あそこはいっぱい石があります。大量に石のあるところで平地をつくらうとしたら、いやでも石垣を築くことになるのも事実なのです。

現状では石垣の下に石が散乱しているところもあります（図32）、この状況はいったい何を意味するのでしょうか。あるいは技術がなくてこうなったのでしょうか。それとも意図的に壊されたのでしょうか。

次の写真を見てください（図33）。この積み方だと下に大きな石を置いて、上の方には平石を横に積んでいくので、石垣として理にはかかっていません。しかし、きちんとした石垣ならば、横に目地が通るように石を並べますが、ここでは横に線が通っていません。

松本の山城と石垣

ここで松本平の山城に残る石垣と、今回の発掘場



図30 虚空蔵山城跡の発掘状況（平場1）



図31 平場1西端部の石積み



図32 虚空蔵山城の石積み①（平場群）



図33 虚空蔵山城の石積み②（同）



図 34 桐原城の石積み① (主郭)



図 35 桐原城の石積み② (主郭周辺)

所の石垣とを比べてみたいと思います。

桐原城の石積みから見ましょう。ここの石垣は先ほどの写真のものより一つひとつの石が少し大きく、一定の大きさの石を用い、目地が綺麗に横につながるように積まれています (図 34)。

この写真でも一部理解できるように、石垣の下には石が散乱しています。この石をどのように理解したらよいのでしょうか。当時もこの状況だったのでしょうか、それとも破城・城割の結果こうなったのでしょうか。

私にとって衝撃を受けたのは肥前名護屋城の跡でした。みなさんは佐賀県唐津市にあるこの城に行っただけですか。肥前名護屋城は豊臣秀吉が朝鮮を侵略する基地として築かれた城ですから、次に政権を握った徳川家康によって破壊されました。それも、壊したということが視覚的に分かるようになっています。壊している状況が最も分かるのは海の側です。徳川家康は朝鮮と和平交渉を行い、朝鮮通信使などに来てもらうため、私たちはかつての豊臣政権とは違います。私たちは秀吉政権とは関係がないので、あのよう城を壊しているのです、と主張しているのです。このために、朝鮮通信使など朝鮮側から海を越えてきた人たちに分かってもらえるよう、海側で見えるようになっているのです。

みなさんお城をつくる時の石垣で、一番大事な場所知っていますか？隅の部分です。日本の城の石垣は、算木積みさんぎという積み方をしていて、最初にコーナーから積み始めるのです。石垣を積む基準になるのが隅ですから、壊す側ではここから潰していくのです。肥前名護屋城の場合、破壊したことが分かりやすいように、遠くから見るとコーナーだけでなく、のこぎりの刃のようにギザギザに見えるよう破壊されています。それと同時に入口、つまり虎口こぐちを壊します。写真 (図 34) の石垣が自然に壊れたのか、それとも城をもう使わなくなった時に意図的に壊したのか。これも大事な観点です。

次の写真も桐原城の石垣ですが、見ていただければ分かるように石積みの高さやテラスのあり方など、今回の発掘地点の石垣とよく似ています (図 35)。石積みと後ろの平が3段構造になっている状況が分かります。防御をきつくするためでしたら、石垣は一気に高くしてしまった方がいいですね。このくらいの高さだったら江戸時代の技術では、一気に築き上げています。この時期はそこまでの技術がないから、このように少しずつ積んで、セットアップして、少しずつ高くしているのです。この石の積み方、この石の大きさは先ほどの虚空蔵山城の石垣とはまた違います。

私が見ている限り松本で最も素晴らしいと思う城の石垣は、山家城やまべのものです (図 36)。みなさんは行ったことがありますか？写真を見て気がつくと思いますが、ここでは石の大きさがほぼそろっています。そして石垣の目地が横にほぼ通った形になっています。しかし、この石積みはコーナーから積んでおりません。松本城などの織豊政権下以降につくられた石垣は、算木積みによって石を長い短いと交互に組み合わせながら一番隅から積んでいくのに対して、これらの城の石垣には隅がないのです。全体としてカクカクしたもの

でなく、丸い形になっています。

山家城の石垣がどのくらいすごいかというと、高さが垂直に2、3 m以上もあるのです。しかも石の大きさがそろい、全体が曲線をなして、とても美しい石垣です。現況の山家城ができたのは天正10年から18年の間、とりわけ13年までの間だと私は考えています。この石積みの技術から見たら、同じ時期につくられたと考える秋吉砦と中ノ陣城の間にある石積みの技術は、間違いなく落ちます。これをどう考えたらいいでしょうか。

再度、今回の発掘現場の石垣を見ましょう（図37）。右端の巨大な石は奥側（左側）に続く石垣と連動するようになっていて、崩れ方などからすると、石積みの技術はそれ程高い技量に見えません。しかも、石積みの後ろは斜面のままですね。何故こんな形になっているのでしょうか。いままで私たちは何度もこの地を歩いていたのですが、今回発掘のため周りを整理すまでこの石垣にほとんど目を向けませんでした。石垣で造成された畑が荒れているとしか思えなかったのです。それが、発掘を試みたらこれまで報告のあったような状況になったのです。



図36 山家城主郭の石積み



図37 平場群最下段の石積み

虚空蔵山の意味

次の写真はこの地域を考えるのに際して最も重要な鍵になる虚空蔵山、会田富士です（口絵1-1）。何々富士という山名を持つ山は全国にあります、中信地方で富士山という名前を冠するのは、おそらく安曇野の有明山（有明富士）とこの虚空蔵山（会田富士）です。いつも私がいいなと思うのは高速道路を松本から長野方面に行く時、会田川の谷からこの山が見えた時で、山容がまさしく綺麗な富士山です。

長野県で国土地理院の地形図に記載されている虚空蔵山は5つもあり、ここ以外に上田市・飯田市・佐久市・長野市に鎮座しています。『日本山名総覧』で見ますと、同名の山がどれだけあるかの順位では26位、28山にも及びます。

このように虚空蔵山という山の名前を理解するためには、この地域のことだけを考えてもだめです。虚空蔵菩薩という仏教世界から、もう一回あの山の意味を考えなくてはなりません。一般的に虚空蔵山は虚空蔵菩薩が祀られていることをもって山名にしています。虚空蔵はアーカシャ・ガルバ、「虚空の母胎」の意味の漢訳だそうです。虚空蔵菩薩とは広大な宇宙のような無限の智恵と慈悲を持った菩薩の意味で、智恵や知識、記憶といった面での利益をもたらす菩薩として信仰されています。会田や四賀地域の人たちが昔から虚空蔵菩薩を拝んでいるということは、みなさん智恵と慈悲に対して大きな尊敬心を抱いてきたということでしょう。そういえば今日も、これだけ多くの皆さんが智恵を求めてやって来ていますよね。もともとみなさんのふるさととはそういう世界なのです。

虚空蔵菩薩から智恵や知識、記憶といった面での利益を得るための修法である虚空蔵求聞持法こくぞうぐもんじほうは、作法に則って真言を100日間かけて100万回唱えます。修した行者はあらゆる経典を理解して忘れないといいま

す。これに関係しては、空海が室戸岬の洞窟に籠もって虚空蔵求聞持法を修したという伝説があります。また、日蓮も12歳の時にこの修法を行っています。つまり、虚空蔵山は単なる山ではなく、信仰の山なのです。くり返しますけれども、この山はみなさんのように、智恵や知識を求めるべき人たちが拜まなければいけないのです。

信仰の場の景観

智恵や知識を持つことを願いとす、信仰の場所にお城がつくられる意味は何でしょうか、再度考えてみます。

次の写真は岩屋神社への参道です(図38)。私が虚空蔵山城に登ったのは2回です。写真をきちんと撮ったのは前回、松本市教育委員会と共に行った時のみです。麓には鳥居もあるし、雰囲気がいいですね。次の写真は岩屋神社です(図39)。素晴らしいですね。なぜここが素晴らしいかというと、信仰の場としてあるべき景観を全部もっているからです。

虚空蔵山は独立峰です。富士山もそうですが、日本人が長らく持ち続けた、高い山の上に神様が舞い降りてくるといふ発想法からすると、虚空蔵山のような独立した姿のいい山には、神様がおいでになるのは当たり前なのです。来臨した神様が籠られるのは岩で、一般的には磐座いわくらと呼ばれます。神様は大きな岩に籠もっておいでなのです。

分かりやすい例でいいますと、諏訪信仰は本来守屋山もりやという山と水分みくまりの信仰です。上社の代表的な社である磯並社いそならべしやは、巨大な岩を磐座としています。もっと分かりやすいのは戸隠信仰です。戸隠山はあのギザギザ尾根を持つ独立峰です。戸隠の名は天照大神あまてらすおおみかみが高天ヶ原の天の岩戸いわくらに隠れたとき、天手力雄命あめのたぢからのおのみことが投げ飛ばした岩戸いわくらによるといわれるように、山全体が巨大な岩(天の岩戸)に見えます。高い山で独立峰、しかも目立つ巨岩のある山、だから神様がやって来るとして信仰されているのです。私が行っている飯山市いひだしの小菅神社も同じく岩山と水の信仰です。

岩屋神社は美しい山容を持つ独立峰の虚空蔵山の中腹にある巨大な岩の岩陰に建物がつくられています。まさに日本人にとって神様がやって来ると考えられていた典型的な場所なのです。この岩屋神社の風景を思い出していただきますと、全国各地の重要な宗教施設の多くが岩陰につくられている理由が理解できるで



図38 岩屋神社の参道入口



図39 岩屋神社

しょう。ですから、みなさんの虚空蔵山は決して特殊なものではなくて、まさに日本人の心のふるさとかもしれないのです。

次の写真は頂上に上がって行く直前の状況です(図40)。

いよいよこれが頂上です(図41)。山頂は見ての通り平らになっています。本来のお城では防御のために主郭の周囲には土塁を築いて攻められないようにするのですが、ここには土塁の痕跡がありません。ここは山頂からの景色が非常に良い。しかもすぐ近く



図40 峯ノ城の副郭と土塁(左側)



図41 虚空蔵山山頂(峯ノ城主郭)

にこのような巨大な岩があります（図 42）。先ほど言いましたように、岩がある所に神様は来臨されます。みなさんがいくつかの神社へ行きますと、大きな石のある場所にわざわざ祠や本殿が設けられたり、岩がない場所では場合によっては船の格好をした石が持ち込まれているのをご覧になれると思います。



図 42 山頂の岩場と会田盆地の眺望

中ノ陣城

では一気に中ノ陣城まで降りましょう。

中ノ陣城は発掘した場所から少し西側に行った所にあります。中ノ陣城背後の堀切から撮ったのが次の写真です（図 43）。前の方に巨大な土の壁のようなものが見えます。おそらく本来はこの壁の手前に巨大な堀切があったはずですが、ここに至る道をつくった時にブルドーザーで埋めてしまったようです。つまり、城の設計者は尾根伝いに背後から攻められたら困るので、主郭背後にわざわざ土の大きな塀、土塁をつくって、その背後には大きな堀切を設けたのです。それを私たちは堀側から見ているわけです。



図 43 中ノ陣城の土塁（背後から）

背後の土塁を中ノ陣の主郭の内側から見たのが次の写真で、奥の高い所が土塁です（図 44）。攻め込まれないようにするためには、敵が攻めて来る可能性の最も高い場所、あるいは攻め込まれると弱い場所に防御装置をつくりますから、ここでは山伝いに攻めてこられたらいけないと思って山の側に土塁を巻いたわけです。中ノ陣城が後ろの虚空蔵山と本当に一体のものだとしたら、わざわざここに堀切を設けたり、土塁をつくらなければならないだろうと思います。

中ノ陣城の主郭を設けるために築いた石垣は、次の写真のようになっています（図 45）。少し崩落している箇所もありますが、私の感じでは桐原城の石垣によく似ていると思います。逆に、今回発掘調査したここから東側にある石垣とは相違があるように感じます。

会田の住民は御柱に参加していた

ところで、会田という場所をお城という側面だけではなくて、もう少し広く見た場合、どんな歴史があるのかについて触れましょう。

諏訪大社の御柱には、今は諏訪郡の人たちだけが参加していますが、武田勝頼の時代までは信州全



図 44 中ノ陣城の主郭



図 45 中ノ陣城の石積み

体で奉仕していました。それは諏訪大社が信濃国の一宮、信濃国にとっての氏神の位置づけだったからです。現在の長野県の中で、中世に参加してない所が実はあるのですが、ご存知ですか。そうです、木曾の人たちだけが参加していません。この理由は木曾がもともと信濃国ではなかったからです。木曾は美濃国だったのが、正式には江戸時代から信濃国に入ったので、中世には国が異なっていて奉仕する必要がなかったのです。

享徳4年7月30日（1455年9月20日）に上社が明年の三才山頭役を会田郷・岩下入道に賦課しました。応仁元年7月30日（1467年9月7日）にも同様の賦課がありましたが、岩下滋野満幸が同年12月14日に海野において討ち死にしたため、子息が2歳で御頭を勤仕しました。文明11年7月30日（1479年8月26日）にも海野下野守氏貞に命じられ、小岩井郷一郷のみで御頭を勤め、余郷は勤仕しませんでした。文明17年7月29日（1485年9月17日）にも賦課がありました。元亀元年4月7日（1570年5月21日）には上社五月会御頭役を会田郷が勤めました。天正6年（1578）2月には上社の大宮の御門屋の負担を「会田五ヶ所」が分担しています。天正9年（1581）には上社の御頭役を会田郷が分担しています。このように、諏訪大社のいろいろなお祭りにこの地域会田郷の住民はずっと奉仕してきたのです。

諏訪大社のお祭りの負担は領主がやるのでしょうか、それとも村人なのでしょうか。変な言い方ですけども、現在の御柱は市町村が主体になってやっているのでしょうか、地元民が中心になってやっているのでしょうか。当然地元の人たちですよね。ですから、上社の御頭役を会田郷が負担しているというのは、会田の郷民、村人が主体になっているのです。祭礼を信州全体で負担する時に村が負担しており、村では住民に役割分担をしていたのです。

郷は自治組織として存在しており、財産も持っていたのです。私たちの会田は中世においても独立した郷として、領主とは関係ないところで自治を行っていたと私は強調しておきます。

しなのの国道者之御祓くはり日記

四賀地区にはとんでもない史料が残っています。それが「しなのの国道者之御祓くはり日記」（信濃国道者の御祓い配り日記）です（図46）。表紙の写真を見て頂ければ分かりますように、「志」という字を書いて「し」、「奈」の字を書いて「な」、「乃」を書いて「の」、これで「信濃」と表記しています。武田家が滅亡する前年の天正9年（1581）に宇治久家という伊勢神宮の御師の書いた、伊勢神宮のお祓いと土産物を地元へ配った、その時の日記です。これは文字からしても、紙の状況からしても、間違いなく当時のものです。これは素晴らしい記録で、普通の村にはこんな良質の史料がまず残っていません。地域としてこれを持っている四賀のみなさんは幸せです。

この記録にはどういうことが書かれているかというと、会田に関しては例えば岩下殿、先ほどから何度も出てくる会田の殿様・領主です。その岩下殿には熨斗1把、鯉節5つ、上のお茶が10袋贈られています。熨斗がどういうものか分かりますか。本来、熨斗はアワビの肉を薄く削いで、干して生乾きになったら竹筒で押し伸ばし、更に水洗いと乾燥、押し伸ばしを交互に何度も繰り返して作ります。熨斗は古来より縁起物

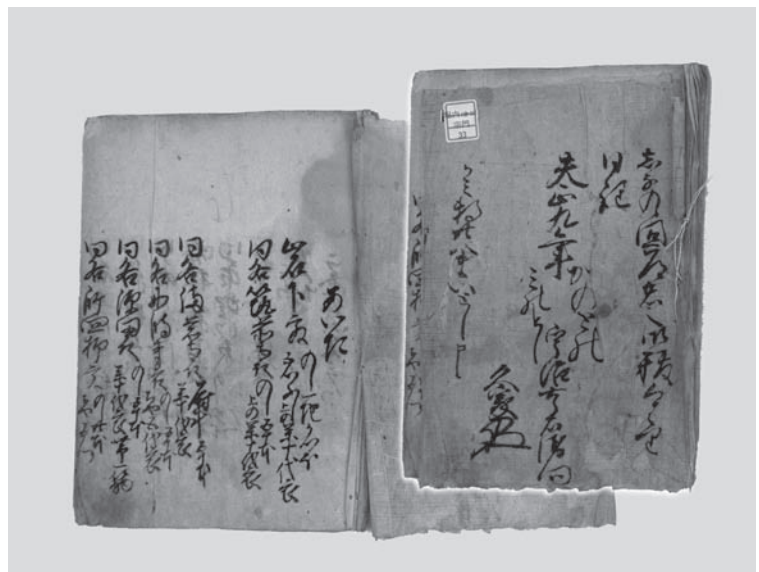


図46 天正9年「信濃国道者の御祓い配り日記」
（松本城管理事務所蔵）

とされ、神饌として用いられてきました。伊勢神宮へは現在でも鳥羽市国崎町から献上されていますが、それを土産として持って来たのです。わざわざ伊勢国の方から来るわけですから、できるだけ軽くて運びやすく、なおかつ価値のあるものを持って来たのです。

当然のことですけれども、道者は配る以上お礼のお金をもらって帰らなくてははいけません。筆頭の岩下殿にはこれだけ贈り物をしているのに対し、2番目の同名筑前守には熨斗を50本、上の茶を10袋となっています。岩下殿には鯉節を5つ渡していますから、岩下殿の方が当然格上です。さらに3番目の筑前守には熨斗50本、お茶は上の茶でなくなっています。こういうランク付けがありました。

会田では岩下姓の者がたくさんいますので、岩下一族が大きな勢力を持っていたといえます。

その次に、鳥羽勘丞のところには熨斗が20本とお茶が5つ。それから同名与三右衛門殿にも同じように渡しています。藤松さんという人もいます。

宗教関係者と職人

これだけ多くの人名が記されている中で、特に注目したいのは、宗教関係者と想像される人たちです。

先達にはお茶を3つ、ぐっと少なくなっていますが、わざわざお茶を渡しています。先達とは、他の人より先にその分野に進み、業績・経験を積んで他を導く人のことで、山伏や一般の信者が修行のために山に入る際の指導者をいいます。ですから、宗教関係者が会田に住んでいたといえるでしょう。次に同じく会田では宿縫殿助殿にお茶を3つ、それから下ではもう名字がない人物たちにお茶3つ、六郎左衛門にもお茶3つ、「この人は我等被官。一別に目をかけ候」と説明されています。つまり「この人は私の家来で、特別に目をかけている」というのです。だんだん下になるとお茶3つ、要するに軽くなっていきます。

これで終わりません。同会田分が15人です。番匠小沢分。番匠というのは今でいう大工さんです。中世では番匠（木造建築にあたる職人）の中で一番上に立つ人が大工で、下には小工がいました。戦国時代頃にだんだん番匠という言葉から棟梁という言葉に変わり、さらに今のように大工という名前に変わっていきます。いずれにしても会田には番匠が3人もいるのです。

まだ会田分が続きます。「糸ヶ寺」には上の茶を10袋、海苔も渡しています。で、「河原崎のりんすそ」と書いてあるのは「りんしゅそ」（隣主祖あたりでしょうか）で宗教者でしょう。「知見寺」も出ています。「ほうそうす」は、宝蔵主ではないでしょうか。「長安寺」も出てきます。ここに番匠、大工が出てきます。「ふた寺」（補陀寺）と、「無量寺」も記されています。次に「宮本の宮坂殿」は、おそらく会田からすぐ下の宮本で、現在の神明宮に関係する人物でしょう。会田入の分でも同じように宗教に関係しそうな人が出てきます。

会田入の分に「こうさい寺」が出てきます。さらに、鍛冶屋さん、「鍛冶屋在家助三衛門殿」と書いてあります。地名だけかもしれませんが。職人さんらしき人たちが見えます。

荻谷原の方に行きますと、ここにも名字を持った人たちがいます。宇治久家は会田の人たちの方には非常に気を使っているのに、武田信玄がお城をわざわざ手に入れたくらい重要な地点である荻谷原に気を使わないように感じます。

会田の経済力

これまで指摘してきた事実の意義は大きいといえます。つまり、会田にはお金持ちや領主がいるし、職人もいたのです。一般的な村だったら職人さんたちまでが、これほど住んでいるわけがありません。それからあんな多くのお寺さんがあるわけがないのです。その上に郷として自治があったのです。

ここはいくつも問題があります。まずひとつ、この地域は私が見る限り大きな農業地帯ではありません。もし虚空蔵山全体が連携するお城だとしたら誰がつくったのでしょうか。多くの経費を使ってたくさんの城

を築き、しかもそれを守るだけの価値があるのでしょうか。先ほどの話のように会田には大きな領主が何人もいたみたいです。しかも、ここは町化していたのです。少なくとも職人さんたちが住んでいます。職人さんたちは一般的な村ではこれほど多く住んでいません。こういうことを全部含んでみると、この地域はいったいどこに経済力の源泉があったのかと、私は考えてしまいます。

そこで先ほどの竹原さんの質問が気になってしかたありません。最初の課題は、なぜ建物が1回しかつくられていないのかです。しかも、あれだけ大規模に造成して、なぜ小屋のレベルなのかです。次に、何故あのような石垣、つまり他のお城の石垣と違う技法の石積みがあそこに築かれているのかです。さらに、どうしてお茶の道具があので発掘されたのか。あそこでお茶をしたと考えるのか、そうでないと考えるのか。それぞれのものの考え方によって、解答もずいぶん違いそうだなあと私は思いました。

戦争は良くない

お城は本来戦争のための施設です。一番いいのは戦争しないことで、武器を必要としない社会を作ることです。このことは是非とも覚えておいていただきたいと思います。

今若い女性の中に「レキジョ」なる人たちがいるみたいですね。これを聞いた時は、「烈女」と間違えて、気性の激しい女性、強い女性だと思っていたのですが、「歴女」で俗に歴史好きの女性、特に戦国時代の武将などに関心を持って、時代小説や史跡めぐりを好む女性のことだそうです。実際、歴史が好きな若い女性たちがタレントとして歴女であることを売り物に活躍しています。ひょっとしてこの中にもおいでになっているかもしれません。上田市は真田幸村で売っています。上田市と真田幸村の活躍がどのように関係があるのかといえば、ほとんど関係ないですね。しかも、今戦国武将として一番人気があるのが伊達政宗と幸村だそうです。これはゲームの結果としてカッコいいからの評価のようです。

大変失礼ですけれども、私は人殺しを商売とする武将たちが格好いいと思われるような世の中をつくりたくないと思っています。私は戦争の中には巻き込まれたくありません。また、いくら戦争があっても私は人殺しを是認しませんし、戦争に加担しません。

戦乱から避難する山小屋

そこで、みなさんにあえて尋ねたいのは戦争が始まったらどうするかです。戦国時代、武田信玄や上杉謙信が戦争していました。あるいは、天正10年以降にこの周辺で大きな戦争の可能性がありました。もし自分たちの住む地域が戦争に巻き込まれそうになったら、民衆はどのようにして安全を確保したのでしょうか。皆さんならどうしますか。

ひとつの可能性として私が主張しているのは、戦争から逃れて山の中に逃げ込むことです。織田信長のことを書いた『信長公記』によれば、武田家が滅亡した天正10年に信濃の人たちは戦乱に巻き込まれまいと山小屋に身を隠しています。武田信玄のことが詳しく書かれている『甲陽軍鑑』などを見ても、一般の人たちは山の中に小屋を設けて隠れています。戦乱から身を隠す場所を山小屋と称している例が古文書や伝承から知られます。村ごと山小屋などの避難場所を設けて逃げ込み、戦乱とは関わりないとして安全を守るわけです。もうひとつは村全体がお城の中に入ってしまう方がいいと思います。塩尻市には北熊井城というとんでもない大きな城跡があります。あまりに大きすぎて、5万分の1の地図を見れば郭が分かるくらいです。何の証拠もないのですが、この城には村全体が入っていた可能性があります。ともに、私たちの安全は私たちが守りますと、村人が用意した施設があったことを前提にします。

秋吉砦と中ノ陣城の縄張りや規模からすると、その中間にあれだけの石積み築き、平場をつくる必要はありません。石垣の技術も異なり、全体が一気に作られたものとは思えません。こうしたことからして、今

回の発掘箇所は村人が逃げ込むためにつくった装置である可能性はないのでしょうか。つまりここはさまざまな勢力の交わる地点ですから、住民が大規模な戦争に巻き込まれる危険性のあった地域です。戦争で生命が危なくなる可能性があるわけです。戦争が起これば巻き込まれて住民の家に火がかけられます。それならば、いざという時には山の中に逃げようとする、そのための施設が必要です。

虚空蔵山は信仰の場ですから、武士たちも神仏のことを考えてあまり乱暴はしないだろう。しかも、あそこは沢があり、水もある程度確保できます。そこに一時期逃げ込めば、どうせ戦争なんて何年もやるわけがないから助かるだろう。

よくよく考えてみてください。戦国時代といっても戦争を行っているのは点にすぎません。しかも一時にすぎません。危ない時に、戦争に巻き込まないようにすれば、しばらく経てば戦争も終わります。

戦争を避けるとき、人びとは何を持って逃げるのでしょうか。当然ですが大事なものを持っていきます。大事な物の代表は何でしょうか。私は来年の農業をするための種籾やさまざまな種子などだと考えます。しかし、こうしたものは一時的に逃げた後、逃げ込んだ人びとによって全て自宅に持ち帰られます。ですから、発掘結果としてこうしたものはでないでしょう。確か中ノ陣城から炭化米が出ています。あのような炭化米を戦争に際して、食糧用に備蓄した米が炭化したと考えるのか、それとも従来のように城に火を付けられて炭化したと考えるのか、さらには種籾用だったのかも考えねばなりません。戦争が終わった際、場合による領主が種籾などを配布しなければ、農民たちは農業をできない可能性もあります。領主は農民が農業をしなかったら、収入がなくなるかもしれません。戦争に際して領主は戦乱から避難した人びとに何をしなければいけなかったのか、そういうことを考えたいのです。

民衆と山城

先ほど竹原さんの報告にあった陶磁器、お茶の道具ですが、今回の発掘地点まで行ってわざわざお茶を点てて飲みたいと思う人がいるのでしょうか。中ノ陣城と秋吉砦の間、あの狭い場所でわざわざお茶を点てるといような生活をする人がいたのか、私には疑問です。むしろ財産として持っていったものが壊れたので、置いてきたのではないのでしょうか。

私たちはもう一度会田郷民の生活を中心にして歴史を考えないといけません。会田郷の郷民たちにとって、戦国時代とはいったいどのような時代だったのでしょうか。厳しい戦乱から逃れるため、一時的な避難場所を用意するために、住民自らが動いた。石垣も専門にこれを行っている人たちでなく、地元の人たちが積んだので、あのような低い技術レベルだとは考えられないのでしょうか。本来の城の石垣の技法と違うのは、百姓たちが見よう見まねでつくったのが理由の可能性もあります。あそこにはすごい人力が加えられています。先ほど竹原さんが言ったように、わざわざ版築といって、土をたたき締め、その上に土を置き、さらにたたき締めるといった技法も用いられています。しかし、一般の人たちは領主の城づくりに動員されたはずですから、それを通じて技術を見、それをまねた可能性もあります。

そうはいいながら、お城とお城の間の空間は安全とみるか危険とみるか、二つの考え方があります。一般の人たちは自分たちが危険になったら、お城に入れるとして保険のようなつもりで、城づくりに参加していた可能性があります。後ろに刀を持った武士がいて、脅しながら一般の民衆に城づくりをさせていたわけではないでしょう。武士は人口の1割程度ですから、もし一般の人たちが城づくりに関して反乱を起こしたら、これを止めることはできません。一般の人たちが率先してお城づくりに参加する理由は、いざという時には自分たちもこの中には入れるという、安全確保のためだったのではないのでしょうか。そういう視点で見ると、今回の発掘結果を含めて、私たちの会田及びその周辺地域は、まだまだいろいろなことを考えていくための材料がありそうです。

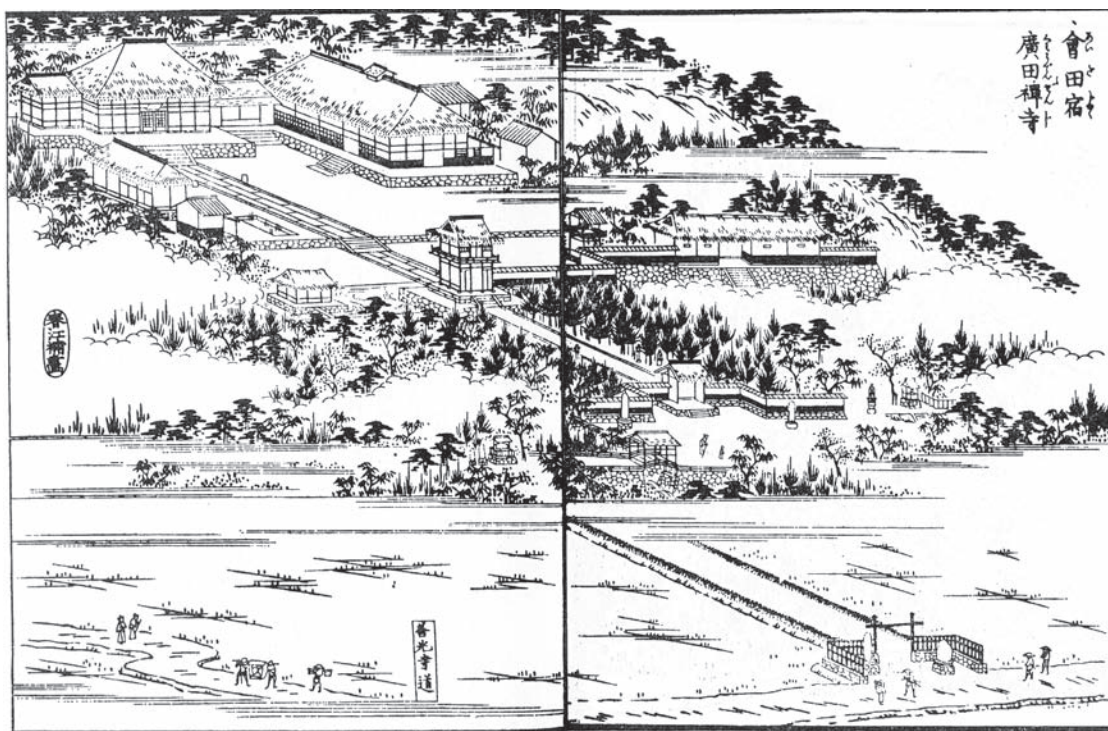


図 47 廣田寺の風景（『善光寺道名所図会』より）

ふるさとも見つめ直す

次は嘉永2年（1849）に書かれた『善光寺道名所図会』に見える、先ほど触れた知見寺の後身、江戸時代の廣田寺を描いた絵ですが（図47）、これだけ大きなお寺がつけられたことの意味は大きいですね。山門や本堂などこれだけの規模のお寺は、そう簡単にできません。背後には豊かなこの地域の経済力があってのでしょう。改めて私たちは私たちのふるさとが、歴史の中でどれくらい重要であったのか考えなければいけません。

次の絵は同じ本から、江戸時代の岩井堂観音の風景です（図48）。岩井堂の場合も、先ほどの述べた虚空



図 48 岩井堂の風景（同上）

蔵山の神が降臨する風景を前提に理解が可能です。岩井堂でもお堂の裏には巨大な岩があって、まさに神が来る場所です。ですから、あの場所にお堂が建設され、神の来る岩に仏像が彫られたのです。このように、私たちのふるさとには日本人が神様や仏様をどういう場所に感じたのかを考えさせてくれる、歴史遺産がいっぱいあるのです。

会田氏の館跡と言われてきた殿村遺跡は、掘れば掘るほどその性格が不明になります。けれども、掘れば掘るほど遺物を通して分かってくることも多いのです。その一つが、間違いなくとんでもない土木量を実施したということです。あれだけの土木量は、今日ここにいるみなさんへ鍬と畚もっこを道具にして、ただでやれといわれて参加し、達成できるようなものではありません。私は日当がもらえたとしても、ご免被りたいですね。ともかくすごいのは、あれだけの土木をしてしまったことです。

そして、殿村遺跡はお城や館の概念から外れています。可能性としてはお寺の跡の方が強いのです。お寺だったとするならば、なぜ私たちのふるさとにはあれだけの土木量をこなすの財力を持った、あるいは人びとを動員できるだけの魅力を持ったお寺があったのでしょうか。

いわゆる殿村遺跡は、単なる点としてしまっただけでは理解ができません。殿村遺跡から背後、虚空蔵山に至る全域が宗教ゾーンとして存在し、その中でそれぞれの地はどのような役割を持っていたかを考えることが重要です。会田氏館跡といわれてきた場所はどのような特性を持っていたのでしょうか。中ノ陣城や秋吉砦は何を守ろうとして築かれたのでしょうか。そして今回発掘された平坦地はこの地域全体の中でどのような役割を負っていたのでしょうか。私たちは発掘した点でものを考えるのではとても足りず、ふるさと全体を面として捉えていかなければいけない時期にきているのです。

普請の意識

それに際して、なぜあれだけ大きな大地改変をして、その主体者は恐怖心を抱かなかったのでしょうか。現代に生きる私たちには思いもよりますが、中世においては土を動かし、大地を改変することは怖いことの一つでした。中世ではお城を築く、あるいは松本城をつくるという場合には、二つの要素がありました。ひとつは普請です。石垣をつくったり、堀を掘ったりする、土木工事を普請といいました。その上に建物、天守閣のような建物を建てるのですが、これを作事と呼びました。普請と作事がセットになってお城はつくられるのですが、「城作事」という言葉は用いず、「城普請」という言葉しか残っていません。城づくりでは台地を改変する方が重要だったので、城普請の言葉が残ったのです。

みなさんが普請という言葉を使う時、道普請という言い方があります。こうした大地に手を入れる普請は、本来普通の人ができるにはいけない行為でした。これは大地の中に神がいるので、神と連絡が取れる特別な人だけが出来るものと理解されていたからです。普請に際しては陰陽師おんみょうじや修験者しゅげんじやなどが参加していました。ですから、大地に穴をあけたトイレや井戸などを埋める時には、神と連絡を取り、神をなだめ行為の承認を得る特別な儀礼をしているのです。

それなのに、あの時代にあれだけの工事をして何とも思わなかったのは、やはり神仏と人間の間で立てる宗教者たちがいた、あるいは僧侶による宗教行為だったから、恐怖心がなかった可能性があります。

経済力の源

それでは、どうしてあれだけの工事ができた財力がこの地で持てたのでしょうか。ひとつはここが交通の要衝、すなわち後の善光寺街道の重要な地点であったためです。街道を押さえることで領主は関銭などを得ることができ、住民は宿場を通して潤います。しかし、これはまだまだ理由の一端で私たちが理解していない、山を背後に置いた経済活動がたくさんあるように思います。

また、誰があれだけの工事を実際に担当したのでしょうか。先ほどの学校跡地の大量な土木量、あれは会田の人たちだけで行ったものなのでしょうか。さらに、その背後に設置された山城などをつくったのは、地元の人たちだけの参加だったのでしょうか。それともこの地の経済力を前提にして、他所から多くの労働者を引き込んだのでしょうか。こういうことも考えなくてはなりません。

虚空蔵山城とは何か

私たちは虚空蔵山城と簡単に呼んでいますが、本当に城なのでしょうか。重要なのは虚空蔵菩薩が祀られている場所に城がつくられたことです。これと似たようなことは、善光寺及びその寺域が上杉謙信によって何度かお城に使用された点にも見られます。善光寺の東側の高台を城山といいます。ここはお城だったのです。重要な宗教施設がお城になる時、宗教施設の意味はいったいどこにあったのでしょうか。まだ私たちは分からないことがたくさんあります。しかも、私たちは現代に生きていますので、社会も価値観も違う中世人の心の内が理解できているとは限りません。私たちが勝手に解釈しているだけで、事実は全く異なっているかもしれないのです。

そういう意味で、虚空蔵山城とはいったい何だろう。先ほどの通り中ノ陣城・秋吉砦から峯ノ城まで全部を含めて呼ぶべきなのか、それともひとつを区別して評価すべきなのか、この解答もできていません。くり返しますけれどなぜ戦国時代会田はあんなに町化できたのか、なぜ職人がいたのか、なぜあんなにお寺が多いのか、分からないことばかりなのです。

みんなで学びましょう

私たちが持っているのは学びの材料です。文化財とは何か、発掘調査をするとは何か、遺跡を残すとは何か、すべては学ぼうとするかしないかで解答が違ってきます。考える材料をどれだけ持っているかによって、私たちは正しい解答に近づけるのです。

ところで、発掘調査という響きはいいのですが、実際には遺跡を壊すことです。1回掘ってしまったら、それ以上の調査はできません。掘り上げた遺物の調査ができるだけです。多くの場合、発掘技術などは時代とともに高度になってきています。殿村遺跡において発掘調査が行われているということは、私たちにとって誇るべきですけれども、同時に一回大地からの訴えを見失うと、二度と声が聞こえなくなる覚悟を持たねばなりません。

松本市は学校をつくらうとして発掘を始め、そして重要だからということで残すことを決め、さらに調査をしています。このことの意味をまずはみなさんに確認していただきたいのです。市が多くの予算を費やして地域の歴史が分かるように発掘調査をし、その場所の保存を決めたと言う意味で、みなさんのように恵まれている人たちや地域が松本市内どれだけあるのでしょうか。これほど多くの勉強できる材料を提供されている人たちがどれだけいるのでしょうか。しかも、さまざまな問題に対する解答はまだできていません。

この地域で、いいなあと思うことはよく勉強している人たちがいっぱいいることです。先ほどの竹原さんは、事実をみなさんにいっぱい伝えようとしていました。現地見学へ行ったことのある人はあそこで何が発掘され、何を説明しようとしているかを、身をもって実感できたと思います。私たちは、これまでの発掘を通して学びのための材料をたくさん得ましたが、発掘は点に過ぎません。虚空蔵山から始まって、私たちがふるさと全体を本当に学び尽くしているか、学ぼうとしているかという、まだまだのような気がします。

「しなのの国道者之御祓くはり日記」については、戦国時代にこれだけ地域のことが分かる史料を持っている地域は希有です。この史料はまさに市民全体の文化財です。わざわざ伊勢神宮からやって来た道者(御師)が、会田の周辺にはこれだけ配り物をしましたと記録しています。当然、これに見合うだけの利益を得てい

たはずです。勢力を持っていた家も、そのランクも分かります。この記録が作られた天正9年という時点で、私たちのふるさととはどんなだっただろうと想像することも大事です。

未来に向けて

最も大切なことは、これだけの美しい景観を私たちは今持っていますが、これをどうしたらいいのか考えることでしょう。みなさんは子孫に何を残したいのでしょうか。私たちの周囲にあるこの美しい景観は、しばらく経つと一変するかもしれません。稲さえも作られなくなるかもしれないのです。秋の実りの時期、あの黄金に輝くこの田んぼから始まってこの美しい傾斜地、そして虚空蔵山、全体が私たちにとっての宝物なのです。とりわけ、私たちにとってこの景観は大切です。大変失礼な言い方ですがけれども、私はあの会田の学校の跡地そのものよりも、ここ全体をどうやって残していくかということを考えていくべきだと申し上げます。点を残すのではなくて、面を残すべきです。

この美しい景観を残せる可能性はあります。その手段のひとつが国の文化的景観の指定を受けることです。それだけの要素がこの地域にはあると私は思っています。その際、背後の山、そして交通の要衝としての道、かつて宗教施設がいっぱいあった、こういうことをまずは会田のみなさんをはじめ、旧四賀村の人たちが誇っていただきたいものです。そして旧松本市の人たちには、この地域が入ってくれたことによって、松本の文化がいかに豊かになったかということを理解してほしいものです。

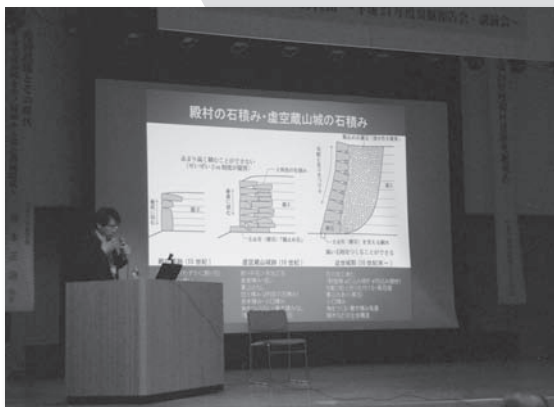
そういう意味でも、みなさんこの景観を残したいと思いませんか。100年先、200年先にこの景観を残すために、私たちはどれだけの努力をしてきたか、これからどれだけ努力するかが、おそらく将来問われることでしょう。そして、みなさんが日々仰いでいるのは智恵の神様、智恵の仏様のおわす虚空蔵山なのです。から、私たちが方策を考えねばなりません。私たちは祖先からの文化を引き継いでいます。しかし、私たちは子孫に対して新たな文化を作って譲り渡そうとしているのでしょうか。子供たちに、孫たちに、今を出発点として新しい文化を加えていくための努力をしなければいけません。

私たち一人ひとりが学ばなかったら、ふるさととはよくなりません。学ぼうとしなければ未来は見えてきません。未来は過去の上にあります。過去をきちんと見据えた上で、現在を分析して、将来を築いていくしかありません。私たちのふるさとの何が優れていて、何が欠けていたのか、これを一人ひとりがしっかり考えることによって、智恵が磨かれるのです。みなさんにとってこの大事な風景、大事な学びの場、それを将来に残すためには、みなさん一人ひとりがまず学ぶしかありません。日々、虚空蔵山を単に拝むだけではなくて、虚空蔵山そのものを学び、私たち一人ひとりが責任を持って智恵を持ちたいものです。そして、歴史を大事にしたうえで、未来をつくっていきたいと思います。私たちは今回の発掘調査を通じていろいろなことを学ばせていただいています。またいろいろな可能性を信じていますが、現時点では結論が出せません。

みなさんとともによりよい未来をつくっていくために、まずは戦争の武器ともいえる城のない時代をつくりたいですね。戦争のない時代をつくるためにも、戦争遺跡の確認と調査は大事です。戦争の道具や遺跡を持たないでいられる時代をきちんと創造していきましょう。そして先ほど見たあの平和な空間が100年、200年先に続くように、お互いに努力しましょう。

私はたまたま殿村遺跡の調査指導委員会の委員長という立場にいますけれども、私がやらなければいけないことは、次の時代に向けてこの遺跡をいい形でバトンタッチしていく、学びのための契機をつくっていくことだと思っています。

時間がきましたのでこれで終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。



殿村遺跡とその時代Ⅲ

—平成24年度発掘報告会・講演会の記録—

発行日 平成26年3月28日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 精美堂印刷株式会社
